OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	フランス人民党1936-1940年（3）
Author(s)	竹岡，敬温
Citation	大阪大学経済学．2014，63(4)，p．1-32
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57037
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

フランス人民党 1936 − 1940 年（3）

竹　岡　敬　温†

4.「自由戦線」の提唱

フランス人民党は，その電撃的な誕生ののち，党勢を急速に拡大させ，1937 年 4 月には，党員数は公称 18 万人にのぼったが，しかし，火の十字架団の後継組織，フランソワ・ド・ラ・ロックのフランス社会党（PSF）は，その 4 倍から 5 倍の党員数を擁してフランス人民党をはるかにしのぎ，同党の党勢伸張の行く手を阻んでいた。しかしながら，職人，商人，中産階級のメンバーによって構成されたフランス社会党（PSF）は，フランス人民党ほど行動的ではなく，ましてや直接行動主義的ではなく，街頭を制圧しようとはせず，大衆デモを組織することもすくなく，また，フランス人民党ほどには党員がよく統制されてはいないようであった。このため，共産党時代から党員の引き抜き技術に長けていたドリオは，先頭に立って，ド・ラ・ロックとその組織に接近し，そのメンバーをかれの党に引き入れようとする作戦を実行した。

「クリシーの銃撃事件」がその絶好の機会をあたえた。1937 年 3 月 16 日，フランス社会党（PSF）クリシー支部は，同市の映画館でレクリエーションの夜の集いを計画し，映画を上映することになっていた。クリシーはパリ北西の工業都市で，人民戦線の砦のひとつであり，人民戦線地区委員会と社会党（SFIO）の市長ジュール・オーフレーに率いられた同市役所は，フランス社会党（PSF）にたいする対抗デモを呼びかけ，午後 6 時には，映画館の近くに，1,000 人ばかりの人びとが集まった。午後 6 時 30 分頃，300 人から 400 人のフランス社会党（PSF）の党員とその家族やシンパが，警官隊によって警護された道を通って映画館にはいった。その間，警官隊は，大量の石や樹木を囲った鉄柵からもぎとった鉄片をかれらに投げつける対抗デモ隊員の襲撃にさらされ，それから逃れるために，何度もデモ隊にたいして攻撃をかけなければならなかった。人民戦線のデモ隊はしだいに数が増え，数千人にふくれあがった。かれらは共産党下院議員ウーエルを先頭にしてデモ行進をしたあと，午後 9 時頃，映画館への通路を遮断していた警察のバリケードと対峙した。午後 9 時 15 分，映画が終わったので，警察は観客に非常口を通って出るように命じ，観客はフランス社会党（PSF）の警備係の指示にしたがって全員退去した。衝突がエスカレートしたのは，そのあとであった。

警官隊は，市役所前広場で何度か銃撃を受けた。デモは急速に暴動の様相を呈し，これにたいして，警察は，デモ隊に解散を命令したあと，午後 9 時 45 分頃，一斉射撃で応じた。2,000 発以上の銃弾が発射された。警視総監，内相マルクス・ドルモワ，官房長官アンドレ・ブリュメルとともに，警察の増援部隊を乗せたワゴン車が現場に到着したのは，そのときであった。ブリュメルは 2 発の銃弾を腿と腋の下に受けて倒れた。警察側に死者はなかったが，257 人が負傷し，デモ隊側は 6 人が死亡

† 大阪大学名誉教授

し，負傷者は約300人にのぼった[203]。その翌日以後，社会党（SFIO）と共産党の機関紙は警察機動隊の暴力を激しく告発し，「この悲劇的事件の責任者」ド・ラ・ロックとドリオの２人の「ファシスト」の逮捕を要求した。共産党の下院議員は，フランス社会党（PSF）とフランス人民党の解散を繰り返し要求した。とりわけドリオは，ドイツの資金で雇った挑発分子をクリシーに送り込んでいたとして，共産党から非難された。

3月24日，国会で開始されたクリシー事件と政府の政策一般にかんする討論のあいだ，ドリオは精力的に発言し，法によって認められた公的自由（言論，信教，結社，集会の自由）に加えられた脅威を厳しく非難した。かれのまえには，ジャン・イバルネギャレーとティクシエ・ヴィニャンクールがフランス社会党（PSF）を擁護したが，ドリオは，フランス社会党（PSF）とは一線を画しながらも，つぎのような言葉で問題を提起した。「フランスには，いまも，集会の自由は存在しているのか・・・フランスでは，いかなる党にたいするいかなる挑発もしていないにもかかわらず，共産党側からの絶えざる対抗デモと攻撃の的になることなく，公的集会を，いや，それどころか，私的集会でさえも組織する権利を行使することができないではないか」，クリシー事件は「フランスの50の都市」で共産党が習熟してきたやり方の新しい例証のひとつにほかならず，「その手順は同一であり」，「クリシーで起こったのは紛れもない内戦の予行演習である」とドリオはのべ，内戦や武装蜂起にかんするコミンテルンとフランス共産党の多くのテーゼを引用した。さらにドリオは，共産党などが，クリシーの出来事はドイツの金によって引き起こされたものであるといいふらしている以上，国会に調査委員会を設置すべきで，調査委員会はすべての政党の経理をあらかじめ調べるべきであると主張し，同委員会には共産党の250人の専従職員，赤字の出版事業，多数の委員会と補佐組織，40にも及ぶ週刊機関紙など，「いずれも自己資金では存続できない」同党の「恐ろしいほど巨大な機構」にかんする情報を自分が提供するであろうとのべた[204]。そして，共産党議員たちに向かって「それが嘘であるというなら，あなた方は調査委員会の前でそれをかんたんに証明することができよう。あなた方は，だれよりも先にわたしの提案を採択すべきである」とドリオが叫んだとき，中道派と右翼の議員たちはかれに拍手喝采を送った。

共産党がロシアから資金提供を受けていることについては，ドリオは，その前々日，3月22日の国会演説で，「共産党はモスクワから17年間に2億5000万フランを受け取っている」と明言し，3月23日には，『ル・ジュール』紙のほか『ル・ジュルナル』，『アクシヨン・フランセーズ』，『ル・ソワール』など主要右翼紙のすべてが，このことを伝えていた。4月6日の『ル・ジュール』紙は，この問題にかんする社会党（SFIO）と共産党の「罪深い沈黙」を非難し，「『ル・ポピュレール』紙は，この重

[203] *Archives Nationales*, F^7 13985, rapport sur l'incident de Clichy, 25 mars 1937; Gareth Howlett, *The Croix de Feu, the Parti Social Français and Colonel de La Rocque*, PhD dissertation, Oxford University, 1985, pp.240-241; John Rymell, *Militants and Militancy in the Croix de Feu and Parti Social Français. Patterns of Political Experience on the French Far Right (1933-1939)*, PhD dissertation, University of East Anglia, 1990, pp.201-202; Jacques Nobécourt, *Le colonel de La Rocque (1885-1946) ou les pièges du nationalisme chrétien*, Arthème Fayard, Paris, 1996, pp.509-514; Sean Kennedy, *Reconciling France against Democracy. The Croix de Feu and the Parti Social Français 1927-1945*, McGill-Queen's University Press, Montreal & Kingston, London, Ithaca, 2007, pp.128-129; 竹岡前掲書, pp.836-839; 剣持久木『記憶の中のファシズム 「火の十字団」とフランス現代史』講談社, 2008年, pp.98-101; 竹岡「フランス社会党（PSF）の誕生と発展――極右同盟から議会政党へ――（1）」, pp.26-27.

[204] Jacques *Doriot, Toutes les preuves. C'est Moscou qui paie*, Flammarion, 1937, pp.40-65.

大な話題を読者に知らせるべきだとはおもわず・・・『ユマニテ』紙も同様に無言を守り通した・・・こうして共産党の下院議員 72 人は，沈黙の恥辱――それは罪の自白以外のなにものでもない――のなかに逃げ込まなければならなかったのである。そのとき，かれらがみつけだした唯一の反撃は，ドリオをサン・ドニ市長の職から罷免するよう哀願するために，内相のもとに馳せつけることであった」と皮肉った[205)]。後述するドリオのサン・ドニ市長解任事件は，新聞各紙の報道通り，ドリオを共産党によってたくらまれた卑劣な政治的陰謀の犠牲者に仕立てあげる機会となったのである。

フランス人民党結成のときから，ドリオは，同党が左翼陣営にも右翼陣営にも組することなく，左翼と右翼の伝統的対立からは自由な独自の道をいくべきだと考えていた[206)]。しかし，そのことは，ドリオがフランス人民党第１回全国大会（1936 年 11 月 9 － 11 日）で「自由戦線」のアイディア――「もし共産党員たちが邪悪な行動をしようとするならば，フランス人民党は，独立した政党ではあっても，左翼と右翼，民間あるいは軍，都市の住民と農民，これらすべての勢力と協力して，ソヴィエト独裁の企てに反対してたたかう“自由戦線”をつくりあげるであろう[207)]」という計画――を表明することを妨げはしなかった。1936 年 4 － 5 月の総選挙のあと，フランス人民党とフランス社会党（PSF）との共同行動の可能性を検討するために，ドリオとド・ラ・ロックとのあいだで 3，4 度極秘の接触がもたれ[208)]，1936 年秋には，アルプ・マリティム県などいくつかの県で協力協定が結ばれた[209)]が，しかし，両党の関係はまもなく悪化し，両党間の交渉は結局実を結ぶにはいたらなかった。既述のように，ドリオがヴィクトル・バルテレミーにたいして「ラ・ロックとわたしとのあいだには深い渕がある」と打ち明けたのは，この頃であった。

ドリオは，1937 年 3 月 27 日の『国民解放』紙の論説で，共産主義者の破壊活動にたいして「フランスのもろもろの自由を守るすべての人びと，すべての政党を結集した自由戦線」の結成をあらためて提案したあと，いくつかの政党や右翼組織と交渉を開始した。5 月 8 日には，ドリオはパリの冬季競輪場での集会――フランス人民党は 5 万人の聴衆と発表したが，競輪場は 1 万 3,000 人（座席数は 8,000）しか収容できなかったはずである――で自由戦線の結成を正式に呼びかける情熱的な演説をおこなった。

ドリオは，その演説のなかで，集会とデモの権利の絶えざる侵害，労働，営業，思想の自由に加えられようとしてる危害を告発し，共産党が党員たちの集団を武装させ，国家権力を完全に奪おうとしていると非難した。そして，このような状況で「フランスは，しだいに，左翼と右翼との分裂以上に共産主義者と反共産主義者とに分裂するようになりました。圧倒的多数のフランス国民が独裁の観念に，ソ連の独裁に反対であることは明白です。ところが，すべてのフランス国民が団結しなければ，少数派の共産主義者たちが，厚かましくも，国を占領するかもしれないのです。われわれが，フランスの自由を守ろうと願うすべての人びととすべての政党をひとつにした自由戦線の即時結成を提案するのは，そのためです」と宣言した。かれが反共産主義のすべての政党にたいしておこなった呼びかけは，「1）労働，思想，出版，集会，営業の自由の擁護，2）共和制の諸制度の絶対的

205) *Le Jour*, 6 avril 1937.

206) D.Wolf, *op. cit.*, p.252, 平瀬・吉田訳, p.256.

207) J. Doriot, *La France avec nous! op. cit.*, p.33.

208) D.Wolf, *op. cit.*, p.179, 平瀬・吉田訳, pp.186, 231; J. Nobécourt, *op. cit.*, pp.521-522.

209) *Archives départementales des Alpes-Maritimes*, 4M 542, commissaire divisionnaire de police spéciale, 1 octobre 1936, 4M 549, directeur de la police d'Etat, 9 octobre 1936, préfet, 27 janvier 1937; S. Kennedy, *op. cit.*, p.135.

尊重」を団結実現のための議論の基礎として提案していた。もちろん，その提案は，各政党がそれぞれ独自の政治綱領をもつ権利を認めていた[210]。

自由戦線結成の呼びかけと同時に，ドリオは，激しい反共産主義の2冊の小冊子を続けさまに公刊した。このうち，『共産主義と対峙する自由戦線[211]』と題した45ページばかりの最初の小冊子は，コミンテルンの行動を分析し，マルクス主義の実験の失敗を論じ，モスクワの外交政策がフランスを戦争に引きずり込もうとしていると主張し，労働総同盟（CGT）の多数の組合を支配することに成功した共産党が国内の混乱を引き起こし，政権奪取を計画していることを内部文書によって暴露しようとした。「ソ連における社会主義の失敗は，フランス共産党からそのいっさいの理想を奪い取った。ロシア人がフランス共産党の指揮権を握っている結果，同党は，文字通り，わが国土に野営するソ連の軍隊になってしまった。この軍隊はやがて動き出すであろう。それはもはや一国に社会革命を起こそうと願い，それが達成できる力のある党ではなく，また，人類を圧迫している重荷を取っ払おうと願っている党ではなくて，いまでは，まさしくフランスを侵略しつつある紛れもない外国の軍隊である」とドリオはのべて[212]，忌憚ない表現で共産党を攻撃した。そして，同冊子の終わりには，かれは自由戦線を人民戦線に対置させ，「われわれはセクト主義者ではない・・・われわれは，なににもまして，くだらない議会ロビーの論争よりも国を救う必要を優先させる・・・そして，たとえ人民戦線に加盟してはいても，自由の侵害に抗議している政党を非難するようなことはぜったいしないであろう」とのべて，人民戦線の一翼を担う急進党が自由戦線からけっして排除されないことをあきらかにしたのであった。

つづいて公刊された『すべての証拠，金の支払いはモスクワ[213]』と題した2冊目の100ページほどの小冊子には，ドリオが1935年と1936年初めに『解放』紙に掲載し，既述の『フランスは奴隷の国にはならない[214]』（1936年）と題して刊行した一連の論説が再録され，さらに，かれが，クリシー事件直後の3月24日に国会でおこなった演説の原稿が収められ，それに共産党の組織，その外国人スタッフの集団，機関紙，出版事業，補助組織にかんする詳細な記述と，国会に調査委員会が設置された場合に「召喚されるべき証人（139人の共産党員と元共産党員）の最初のリスト」が加えられていた。

5月8日の冬季競輪場でおこなわれた呼びかけより先に，ドリオは書面で書かれた自由戦線結成の提案をつぎの9政党に差し出していた――フランス社会党（PSF　フランソワ・ド・ラ・ロック），国民社会共和党（ピエール・テタンジェ，元愛国青年同盟），フランス共和派連盟（ルイ・マラン，最大の議会右翼グループ），人民民主党（ピエール・シャンプティエ・ド・リブ，キリスト教的傾向の中道右翼の小政党），民主同盟（中道右翼の政党，ピエール・エティエンヌ・フランダンとポール・レノーが国会議員として重要な役割を演じていた議会グループ），農本党（ピエール・マテが率いる極右傾向の小政党），社会主義共和派連合（マルセル・デアやジョゼフ・ポール・ボンクールなどの社会党SFIO離党者で構成），フランス急進党（アンドレ・グリゾーニなど急進党離党者のナショナリスト的傾向の小グループ），

[210] *L'Emancipation nationale*, 9 mai 1937. 1937年5月8日のドリオの演説は『フランスの自由の擁護』と題した小冊子（Jacques Doriot, *Défense des libertés françaises*, Paris, 1937）として公刊された。

[211] Jacques Doriot, *Le Front de la Liberté face au communisme*, Flammarion, Paris, 1937.

[212] J. Doriot, *ibid.*, p.19.

[213] J. Doriot, *Toutes les preuves. C'est Moscou qui paie, op. cit.*.

[214] J. Doriot, *La France ne sera pas un pays d'esclaves, op. cit.*.

急進党（エドゥアール・エリオ，エドゥアール・ダラディエ)。このリストから判断して，自由戦線結成を呼びかけたドリオの戦術が，左翼と右翼の分裂を親マルクス主義と反マルクス主義の対立に置き換えようとすることにあったことが理解されよう。しかし，社会主義共和派連合と急進党がドリオの呼びかけをはっきりと拒否したため，ドリオは自由戦線を，事実上，右翼諸政党の同盟に変えなければならなかった。

結局，ドリオの呼びかけにたいしては，共和派連盟，国民社会共和党，農本党だけが自由戦線への加盟に同意し（しかし，農本党は，いったん好意的回答を寄せたが，のちに撤回した)，その他には，元パリ市会議長シャルル・トロシュー，グザヴィエ・ヴァラ，フィリップ・アンリオ，ジャン・ルイ・ティクシエ・ヴィニャンクール，ジョルジュ・シュアレスなどの幾人かの個人が自由戦線への加盟の意志を表明するにとどまった。このうちシュアレスは，1937 年 6 月中頃にフランス人民党に入党した。57 人もの代議士を擁した共和派連盟の加盟にもかかわらず，フランス社会党（PSF）が言を左右にして態度を保留しつづけたので，結果はドリオの期待を裏切るものであった。5 月 28 日に開かれた自由戦線加盟組織の集会には，ド・ラ・ロックはフランス社会党（PSF）下院議員フェルナン・ロップと政治局長エドモン・バラシャンを使者として送るにとどめ，2 人は，加盟受諾の前提として，加盟組織同士間の批判を止めること，加盟組織のそれぞれが他組織の党員を引き抜こうとはしないことなど，いくつかの条件を提起した。ドリオは，表面的にはためらうことなく，この条件を受け入れ，かれが協定締結の基礎として提唱していた項目のなかに，「自由戦線加盟諸党間の相互批判は共同行動の期間中は禁止される」という条項を書き加えた。それは，1934 年 7 月 27 日に共産党と社会党（SFIO）によって結ばれた統一行動協定をおもわせる文章であった。しかし，このような保証にもかかわらず，1937 年 6 月 9 日に召集されたフランス社会党（PSF）臨時全国評議会は，自由戦線への加盟を最終的に拒否した。

このフランス社会党（PSF）臨時全国評議会の直前，同党下院議員のポール・クレセールが，ドリオに宛てた手紙のなかで，フランス社会党（PSF）は，地方レヴェルでの一時的な協定は拒否しないであろうが，恒常的な同盟を結ぶことはできないであろうと告げ，その理由をつぎのような文章で説明していた。「マルクス主義にたいするたたかいは，必要ではあるが，しかし，それは“否定的な”たたかいで，われわれの行動の本質をなすものではありません。われわれの行動の本質，それは階級闘争を排除し，市民的奉仕の規律を確立し，職業労働を組織し，このようにしてつくられた新しい制度とその経済的役割に共和制国家を適合させていくことをめざした，道徳的，社会的，政治的秩序における“肯定的な”革命なのです[215)]。」このクレセールの文章は，あいまいな表現であったにせよ，たんに反共産主義をめざした政党結集の“否定的”性格を主張しようとするものであった。

たしかに，「反ファシズム」が人民戦線結成の絆であったのとはまさしく対照的に，「反共産主義」は中道派から極右までのきわめて異質な諸組織をつなぐ唯一の絆であった。しかし，フランス人民党との連合は，左翼勢力とフランス国民のすくなからぬ部分からファシズムの嫌疑をかけられていたフランス社会党（PSF）をまちがいなく危険に巻き込むであろうとおもわれたのであり，クレセールも，ドリオ宛ての手紙のなかで，「自由戦線は，その敵対者には，ファシストの共同戦線とみられるでしょうし，それはむしろ人民戦線を強化し，フランスを 2 つの陣営に分裂させることになりましょう」と

---

215) *Le Flambeau de Flandre-Artois-Picardie*, 15 mai 1937.

のべていた。フランス社会党（PSF）は，自由戦線を，その反動として，いまや弱体化しつつあった人民戦線の団結をかえって強化しかねない右翼連合とみたのであった。

フランス社会党（PSF）の自由戦線への加盟問題は，こうして，1937年6月9日の同党臨時全国評議会で決着をみた。同党の指令を受けてフランス人民党との交渉に当たっていたフェルナン・ロップの報告は，「われわれは現在，ひとつの実験の終わりに立ち会っている。その実験をおこなった与党〔人民戦線政府〕は，その極左からの右派の離反を勇気づけることのできる風土のなかでしか崩壊しないであろうが，自由戦線の風土は，逆に，この崩壊の過程を阻止するものである」と結論した。また，かれの報告は，あらためて，フランス社会党（PSF）が「極右」という刻印を拒否し，あまりにも基礎の偏狭な連合のとりこにならないように注意を促し，ファシズ的傾向をもった右翼の結集は，ただ人民戦線勢力を結束させるだけであろうと主張していた[216]。この結果，フランス社会党（PSF）全国評議会は，自由戦線の結成が力の弱まりつつある人民戦線の復活をたんに助けることにしかならないと考えて，参加拒否を決定したのであった[217]。

しかし，フランス社会党（PSF）の自由戦線加盟拒否の理由は，それだけではなかったとおもわれる。おそらくド・ラ・ロックは，ドリオによって始められたキャンペーンの意味をよく知っていたのであろう。ボルシェヴィズムの学校教育を受けたドリオには，共同行動をおこなうとき，同盟集団の党員の引き抜きに成功するのは，組織がもっともしっかりしていて，もっとも活動的で，もっとも一貫した教義をもった党であることがよく分かっていた。一方，自由戦線に加盟すればフランス人民党のパートナーとならなければならないフランス社会党（PSF）は，その党員たちが，ドリオの明確で積極的な姿勢に引っぱられていくという危険にさらされるのを警戒したのであろう。

フランス社会党の参加拒否を知って，ドリオは落膽を隠せなかった。ドリオは「われわれには辛抱が足らず，われわれの要求が過大であったなどとはいえないであろう。1か月以上われわれを待たせたのち，フランス社会党（PSF）はいくつかの条件を提示してきた。われわれはそれらを検討し，受け入れた。フランス社会党（PSF）が自由戦線加盟を拒否したのは，われわれの好意的な回答を受け取った数日後のことである」とのべ，『国民解放』紙のかれの論説を「連合か，もしくは共産主義か[218]」という大げさなタイトルで飾った。けれども，かれは，その後しばらくは，苦い思いを抑えることができなかった[219]。

この自由戦線結成のキャンペーンは，しかしながら，フランス人民党にとっては，その「ブルジョワ的」傾向を強める結果となり，同時に，同党の独自性と一部の支持者を失わせる結果となった[220]。中産階級の支持者を広くかき集め，味方につけようとしたドリオは，ドリュ・ラ・ロシェルや結成直後の党勢拡大期にフランス人民党に入党した知識人たち――自分たちの「革命的」希望に応えるフランス流ファシズムの表現をフランス人民党にみいだしたと信じた人びと――の多くをかれから遠ざけ，一部の民衆層の支持を失うという危険を冒したのであり，このフランス人民党の「方向転換」は，ドリオの期待とは反対の結果を招いたのであっ

[216] F. Robbe, Le Parti Social Français et le Front de la Liberté, *Le Flambeau*, 22, 29 mai et 12 juin 1937.

[217] J. Nobécourt, *op. cit.*, pp. 575-576; S. Kennedy, *op. cit.*, pp. 135-136; 竹岡前掲書, pp. 843-846; 剣持前掲書, pp. 106-114; 竹岡「フランス社会党（PSF）の誕生と発展――極右同盟から議会政党へ――（1）」pp. 34-36.

[218] *L'Emancipation nationale*, 12 juin 1937.

[219] D.Wolf, *op. cit.*, pp. 252-266, 平瀬・吉田訳, pp. 256-266; J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit.*, pp. 271-275.

[220] P. Milza, *op. cit.*, pp. 175-176.

た。

さらに，ドリオはもうひとつの気掛かりをかかえていた。クリシー事件から2か月後の1937年5月25日，サン・ドニ市長ドリオは，職権濫用と市行政の不始末を告発され，社会党員の内相マルクス・ドルモワによって市長の職を罷免されたのである。

この年の初め，3人の財務検査官がサン・ドニ市役所を視察し，その報告書が3月18日，政府に提出され，ついでドリオに伝達された。4月2日に，ドリオは「提示された所見にたいする回答」を知事に送付した。内相が罷免命令に署名したのは，その後2か月近く経過した5月25日のことであり，罷免理由は，「サン・ドニでおこなわれた調査の結果，市の行政にはドリオ氏に市長として責任がある重大な職権濫用と不正行為のあることが判明した。このことを考慮して・・・」ときわめて短い文章で説明されているにすぎなかった。

実際には，財務検査官たちは，その報告書のなかで，サン・ドニ市が困難な財政状態にあることを認めたが，それは「大部分，経済危機に責を帰すべきものである。それはある程度まで市の社会政策にも起因するが，それについて判断を下すのは，われわれの役目ではない」と書くにとどまった。ただ，その反面，検査官たちは，若干の過度ないし不規則な支出，すなわち過剰な数の市職員の不適切な雇用，使途の明確でない出張旅費，地方の祝賀行事のために市の政治的友好団体に認めた事前見積もりの助成金，などを指摘していたが，はっきりと不正を結論していたのではなかった。

検査官の報告書の提出から罷免命令が出るまでに7週間の長い期間を要したのは，内相マルクス・ドルモワや政府が共産党の圧力に屈するまでのためらいがその理由であった。共産党は，1936年11月以来，サン・ドニ市の財政に2000万フランの「使途不明金」が存在することに言及し，ドリオを罷免するよう政府を攻めたてていたのであり，財務検査官の視察が始まるまえから，ドリオの運命は決まっていたのである。かれは共産党からの政治的仕返しの犠牲になったのであった。1937年5月25日の『ユマニテ』紙で，同紙編集主幹で共産党政治局員のマルセル・キャシャンは，内相ドルモワに，「市政運営の状態がいまやよく分かった以上，大労働者都市の有権者の圧倒的多数に吐き気をもよおわせている市長をサン・ドニのプロレタリアートから厄介払いするのに，いまさらなにを待っているのか。それは，即刻必要な政治的衛生管理である[221]」とドリオの追放を激しく要求した。ドリオの罷免命令は，この日のうちに署名された。一部の世論はこの罷免をもっぱら政治的動機によるものとみなし，人民戦線に敵対的なすべての新聞は，罷免措置を「モスクワの命令」と書き立てた。罷免が告げられるや，ドリオは，「とっさに思いついた勇気ある行動として」（ディーター・ヴォルフ[222]），かれにはとどまりつづける権利のあった市会議員（市長は市会議員たちのあいだから互選される）の職の辞任をセーヌ県知事に申し出た。

選挙戦が始まった。ドリオの有力な対立候補は，1936年の総選挙のときと同様に，共産党候補フェルナン・グルニエであった。人民戦線サン・ドニ地区委員会は，ドリオの市政運営にかんする検査報告書からの抜粋に解説をつけた，『われわれは告発する』と題した25ページほどの小冊子を作成して配布した。同委員会は，フランス人民党の右翼的動向に反対する組織的キャンペーンも展開した。ドリオがヒトラーとの話し合いを熱心に勧めてきたため，また，フランス人民党の教義，組織形態，行動がナチスのそれとよく似ているため，反対者は同党をヒトラーの手先であると告発していることが強調され，ドリオはサン・ドニの「総統

221) *L'Humanité*. 25 mai 1937.
222) D.Wolf, *op. cit.*, p.249, 平瀬・吉田訳, p.254.

（ヒューラー）」と呼ばれた。1937年春以来続けられてきた，極右政党を含む――実際には極右政党だけの――すべての反共産主義の政党とともに自由戦線を結成するというドリオの提案も，攻撃の対象となった。

ドリオの市長職罷免は，フランス人民党の歴史においてひとつの転換点を画することになった。1937年6月20日におこなわれたサン・ドニ市会議員選挙の投票結果は，ドリオの惨敗に終わり（共産党候補フェルナン・グルニエが1万565票を獲得したのにたいして，ドリオは6,504票しか集めることができず，その得票率は37.9パーセントにとどまった），「赤い都市」サン・ドニは共産党の手に戻った[223]。ドリオは，かれの敗因を反対派のすさまじい新聞キャンペーン，パリ地域のすべての共産党員の動員，「湯水のように使われたモスクワの金」のせいにし，また，「ナショナリスト」の有権者が，棄権するか，なげやりになって対立候補に投票するかして，かれを見捨て，とりわけド・ラ・ロックのフランス社会党（PSF）の党員たちが，ドリオの勝利の疑わしいことをほのめかして，穏健派の有権者たちの投票意欲を失わせ，棄権させたと主張した[224]。しかし，実際には，投票5日まえに集められたフランス社会党（PSF）パリ地域代表者会議は，サン・ドニの同党党員たちに，宣伝活動はフランス人民党や自由戦線のためにではなく，フランス社会党（PSF）のためにおこなうべきではあるが，しかし，投票はドリオにするようにと明確な指令をあたえていたのである[225]。したがって，フランス社会党（PSF）との「自由戦線をめぐる確執」というのは，フランス人民党が労働者都市サン・ドニに引き起こすにいたった反発を隠すために，ドリオとその仲間たちが口実に使った間違った理由であった[226]。

ベルトラン・ド・ジュヴネルは，その回想録のなかで，投票日の晩のドリオの姿を想い起こして，つぎのように語っている。「その晩，わたしは，ドリオが，まるで“敵に痛打された”あと，リングのコーナーに倒れ込んだボクサーのように，長い腕をだらりと下げて，ぐったりとソファーに坐り込んでいるのをみた。もちろん，わたしはそのとき自分も“セコンド”のひとりだと感じていたが，ボクサーが一息つくのを助けるためにタオルをあおぐものもいたし，足をマッサージするものもいた。また，耳もとで励ましの言葉をささやいたり，誤まった自信を吹き込むものもいた。」そして，このあとにつづけて，「わたしはすっかり気力を失ったドリオの姿を思い出す。あの晩がかれの人生において決定的な役割を演じたことを，わたしは疑わない。あの晩がかれを右翼の腕のなかに突き落としたのである[227]」と書いている。

ドリオは，共産党から労働者階級を奪い取ろうという希望の終わりを告げるものであった市議選の惨敗に反発して，かれの下院議員の議席をも放棄する決意をした。選挙の結果のすべてがまだ市役所に届かないまえに，ドリオは，友人たちが思いとどまらせようとしたにもかかわらず，市役所のバルコニーから，市役所前に集まる群衆に向かって，第一助役のマルセル・マルシャルに，かれが下院議員を辞職することを告げさせた。それはおそらく衝動的な行為であったろうが，名誉を尊ぶ行為でもあった。6月26日の『解放』紙上で，ドリオはその行為をつぎのように意味づけている。「わたしは，ひとりの人物がその選挙区の政治的多数派を代表しなくなったときには，下院の議席を

---

223) J.-P. Brunet, *Saint-Denis, la ville rouge, 1890-1939, op. cit.*, p. 411 sq.

224) *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 341, dossier 8310-1, pièce du 23 juin 1937,《Correspondance 3》; *L'Emancipation*, numéros du 26 juin 1937 et suivants.

225) *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 341, dossier 8310-1, pièce du 17 juin 1937.

226) J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit.*, p. 280.

227) B. de Jouvenel, *op. cit.*, p. 301.

放棄すべきであると考える。わが国の政治制度が威信と権威をすっかり失ってしまったのは，たぶん，このような規則がこの国の政治屋たちによって守られてこなかったからである。国民は汚い手口をひどく嫌っている。代議士たちによってもはやかれらには権利のない肩書きを詐称されるほど，国民にとって不愉快なことはない。たしかに，いかなる議会規則もわたしが議員を辞任するのを義務づけてはいない。しかし，それに代わって，名誉がわたしに議員辞任を絶対的な義務として課しているのである[228]。」このようなドリオの冒険的性格の行動のなかに，自分の身にふりかかった運命に刃向かうことによって，挫折を乗り越えようとするかれの意志をみることも可能であろう。こうして，ドリオはフランスの政治制度にかれを結びつけていた最後の絆を断ち切ったのである。

6 月 20 日の市会議員選挙でのドリオの敗北の結果，新市長の選出が必要となったが，第 1 助役で市役所におけるドリオの右腕であったマルセル・マルシャルが 28 票対棄権 7 票で市長に指名された[229]。6 月 26 日の『解放』紙上で，ドリオは「われわれはすこしも敗北はしていない。重要なのは最後の戦いである。われわれは巻き返しを図るであろう。フランス国民はモスクワに勝利するであろう[230]」と主張した。7 月 10 日の同紙は市役所の前に立つ新市長の写真を掲載したが，かれの後ろには，右手を前方に差し出して敬礼する巨大なドリオの人影が写っていた。サン・ドニでも全国レヴェルでも，フランス人民党の党員たちの活動を鼓舞しつづけたのは，だれよりもドリオであった。

しかし，ドリオは，かれが放棄した下院の議席を争う補欠選挙については，幻想を抱いてはいなかった。ドリオは，代議士としてかれがかざしていた松明を引き継ぐ仕事をフランス人民党サン・ドニ支部書記イヴ・マローに託したが，1937 年 8 月 1 日の投票では，有権者は 6 月の市会議員選挙のときと同様の審判を下した。マローは選挙区全体で登録有権者数の 18.1 パーセント，有効投票の 25.9 パーセント――サン・ドニ市だけでは，得票率はこれよりわずかに上回ったが――しか獲得できなかった。これにたいして，対立候補の共産党のフェルナン・グルニエは登録有権者数の 37.9 パーセント，有効投票の 54 パーセントを獲得して，第 1 回投票でやすやすと当選した。社会党（SFIO）候補も善戦し，1936 年 4 − 5 月の総選挙の第 1 回投票結果のほとんど倍の票を獲得した。このように，フランス人民党は，それが誕生した場所においても，大きく敗退したのであった。既述したように，ジャン・ポール・ブリュネは，1938 年 3 月のサン・ドニにおけるフランス人民党の党員のうち，69.8 パーセントがブルー・カラーの労働者であったことから，同党の党員構成が，1938 年においても，この労働者都市の社会学的プロフィールにかなり合致していたとのべているが，しかしながら，この数字が正確であったとしても，その労働者はすでにサン・ドニの労働者階級の少数派でしかなかったのである[231]。

予想されてはいたけれども，ドリオ支持者たちの受けたショックは大きかった。実際，サン・ドニのドリオ支持者にとっては，1937 年 8 月から 11 月までの数か月は陰うつな時期であった。共産党はサン・ドニの市議会を解散させるよう，何度も政府に圧力をかけ，機関紙によって強力なキャンペーンをなおも続けはしたが，しかし，ドリオの運命が事実上終わったと感じていた。フランス人民党はまだ市議会の多数派を占め，市長のポストを明け渡してはいな

[228] *L'Emancipation*, 26 juin 1937.
[229] 人民戦線派の市会少数派は，新しく選挙された 5 人の市会議員とプロレタリア統一党（PUP）の 2 人の市会議員から構成されていた。J.-P. Brunet, *Saint-Denis la ville rouge 1890-1939, op. cit.*, p. 411 sq.
[230] *L'Emancipation*, 26 juin 1937.
[231] R. Soucy, *op. cit.*, pp. 237-238, (traduction française) *op. cit.*, p. 335.

かったが，サン・ドニの街を支配するようになったのは，共産党であった。

しかし，1937年12月3日，行政裁判の最上級裁判所の権限をもつ参事院（コンセイユ・デタ）が，形式上の瑕疵を理由に，ドリオの罷免の決定を破棄した。このニュースはまたたく間に広がり，フランス人民党に忠実にとどまっていた党員たちはもちろん，同党のあいつぐ敗退の結果，情熱を失い，気力を無くしていた党員や元党員たちも，みな興奮し，汚名をそそがれた――とかれらは信じた――党首を歓迎しようとした。この日の夕方，ドリオ支持者約1,000人が市役所に押しかけ，外では，市役所前の広場や近くの街路でさらに1,000人ばかりの支持者が集まって，フランス人民党の党歌「フランスよ，汝を解放せよ！」を歌い，「国中にフランス人民党を！市役所をドリオの手に！」と叫んだ。午後10時15分頃にドリオが到着したとき，かれを歓迎する熱烈な拍手喝采が長く続いた[232]。

同夜，臨時に招集された市議会にたいして，マルセル・マルシャルは参事院（コンセイユ・デタ）の決定を説明し，市長のポストをあらためてドリオに渡すために，自分は辞任したいと告げた。ついで，市役所の大ホールに集まった熱狂した聴衆を前にして，マルシャルはドリオに向かって市長辞任の提案を繰り返した。もちろん，ドリオはそれを受け入れようとはしなかった。ドリオは，聴衆にマルシャルにたいして拍手喝采を送らせ，自分が当面果たさなければならない使命について，つぎのように語った。「わたしが現在果たさなければならない使命は，あなた方の苦しみや不幸を毎日心配するという仕事以上に，困難で複雑で戦闘的な使命なのです。わたしは，わがフランス人民党の名において，不正を打ち破るために，フランス国民を結束させたいと願っているのです[233]。」

国内では，1937年秋以来，労働争議が激化し，1937年から1938年にかけては，人民戦線を形成する左翼諸政党間の対立と反目がしだいに強まった。のちにくわしくみるように，1938年4月10日の第3次ダラディエ内閣の成立は，やがて人民戦線の崩壊を決定的にし，同内閣による週40時間労働法の修正に反対して労働総同盟（CGT）が呼びかけたゼネストの失敗が，人民戦線の弔鐘を鳴らすことになる。このような事態の進行が共産党にとって不利な状況を生み出したのに反して，フランス人民党はおそらくこの時期その最盛期を迎え，1938年1月には，同党は党員数が30万人近くに達したと発表した。しかし，1938年3月11－13日に第2回全国大会が開催されたときには，党員数は25万人と発表され，すでに党勢拡大の動きは退潮に転じていた。

第2回全国大会は，1,000人以上の代議員と多数の招待者を前にした，6時間に及ぶドリオの長い演説から始まった。ドリオは「フランスの悲劇的な退廃」とかれが呼んだものの諸要因をあげ，この退廃をもっとも顕著にあらわしているのが経済的衰退であるとのべた。そして，先の大戦のもたらした悲劇的結果のなかでも，とりわけ重大だとおもわれるのは，出生率のいちじるしい低下，「不可能ぎりぎり」までの財政的負担の増加，農民の貧困化，中産階級の崩壊，青年層の抱く不安感などであるが，人民戦線の経済・社会政策はこれらの困難になにひとつ解決の糸口さえもたらさなかった，と主張し

232) *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 341, dossier 8310-1, pièce du 4 décembre 1937; *Archives communales*, carton《D. Révocation de Doriot…》, pièce《meeting du 3 décembre 1937》; *La Voix populaire*, 10 décembre 1937; *L'Emancipation*, 11 décembre 1937; Fernand Grenier, *Ce bonheur-là*, Editions sociales, Paris, 1974, p.242.

233) J.-P. Brunet, *Saint-Denis la ville rouge 1890-1939, op. cit.*, p.421; J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit.*, p.282.

た[234]。そして，そのため，フランスは経済的立ち直りの機会を逸したとのべたが，その判断は正しかった。

演説のなかの外交政策に宛てられた部分では，ドリオは，「平和主義は軍備の縮小を主張することではなく」，フランスの軍事力を拡充し，諸隣国の軍備と同水準に維持することが絶対に必要であると主張した[235]。そして，ヨーロッパ諸列強の兵員数，所有飛行機数とその生産計画，海軍の艦船数を列挙して，それらの国の戦略的状況について詳細な分析をおこない，「このような国ぐにのあいだでおこなわれる戦争でいったいどの国が勝つのか，それをいうことができるものがありましょうか。神が地上をみているならば，それを知っているのは神だけです・・・軍事力がこれほどたけり狂うなかでは，地上で何千万の人びとを巻き込むであろう戦争のあと，いったいなにが残るというのでしょうか。この問題を客観的に考えなければならないのは，わが国がこのような冒険に身を投じるのをわれわれが望んでいないからです。1938 年の今日，戦争をすることは，フランスにとっては，最小のチャンスしかない最大のリスクを意味しています。フランス国民は精神的に戦争の準備ができていないし，物質的にはなおさら，その準備ができてはいません。フランス国民は日に日に後退しています。実際また，戦争になれば，たとえもしフランスが勝ったとしても，たいしたものがえられるわけではありません。反対に，敗戦はフランスにその植民地やアルザス・ロレーヌ，そして，そのもっとも豊かな地方を失わせることになるでしょう[236]」と演説を結んだ。

軍備を拡張しなければならないが，しかし，平和を守る政策を実行すべきであるというのが，ドリオの主張であった。そのためには，まず，ソヴィエト・ロシアを激しく嫌悪するあまり，ドイツに接近しようとしている中央ヨーロッパの同盟国との良好な関係をしっかり持続するために，かれが「悪魔との契約」と呼んだ[237]仏ソ相互援助条約を破棄すべきであり，つぎには，「フランスのヨーロッパ政策の基礎とすべき」イギリスとの「“打算的”協調関係」を維持し，そして，イタリアとも和解しなければならない，とドリオは主張した。

フランス人民党第 2 回全国大会 2 日目の 1938 年 3 月 12 日未明，「オーストリア併合」を実現するために，ドイツ軍がオーストリア領に侵入した。ドリオはヒトラーの武力行使と条約違反を非難したが，それを許したのはフランスの外交が積み重ねてきた過ちであるとして，「オーストリアの独立は，フランス，イタリア，イギリスの対外的支援によってしか，維持され保証されることができません・・・英仏伊戦線の放棄とベルリン＝ローマ枢軸の結成がオーストリアを消滅させようとしているのであり，フランスではひとりの人物がこのことに我慢ならないほど責任を負っています。それはレオン・ブルムです。ブルム氏はイタリアとフランスの友好関係の墓堀人なのです」と主張した[238]。3 月 12 日朝，ヒトラーは勝ち誇ってウィーンにはいった。ベルリン＝ローマ枢軸は強化され，イタリアに接近するというドリオの願いは，このときは空しい希望に終わったが，「オーストリア併合」後も，かれはイタリアへの接近を頑として要求しつづけた。

また，演説のなかで，ドリオはフランコとの交渉を要求したが，それはフランスが地中海で自由な行動を取り戻し，兵器生産に欠くことのできないスペイン産黄鉄鉱をふたたび輸入できるようにするためであり，それはいっさいのイデオロギー的介入のない現実主義の名においておこなわれたのであった。スペイン内戦にかん

[234] J. Doriot, *Refaire la France, op. cit.*, pp. 11, 18, 22.
[235] J. Doriot, *ibid.*, pp. 66, 75.
[236] J. Doriot, *ibid.*, p. 74.
[237] *La Liberté*, 3 septembre 1938.
[238] J. Doriot, *Refaire la France, op. cit.*, pp. 57-58.

しては，「われわれは，共産党が熱中した“白人奴隷売買”を止めさせようと行動した。われわれの行動は，数千人の若いフランス国民の命を救った」とのべて[239]，国際旅団のための義勇兵募集機関にたいしてフランス人民党がとった反対行動に触れただけであった。しかし，実際には，フランス人民党は，期待を裏切られてスペインから帰ってきた50人ばかりの義勇兵を同党の主張の味方につけ，1937年1月13日にはサン・ドニの市立劇場で，2月9日にはパリの冬季競輪場で，集会を組織し，そこでこれらの義勇兵の多くが発言したうえ，ドリオがすべての――とりわけ未成年の――義勇兵の早期帰還をつよく要求した。これと並行して，フランス人民党は，モスクワが，ささいな規律違反やとりわけ無政府主義者が嫌疑をかけられた政治的「偏向」を理由に，義勇兵たちを粛清する仕事を委ねた，フランス共産党幹部で「アルバセテの死刑執行人」と呼ばれたアンドレ・マルティを，国際旅団総監としてスペインに送ったことを厳しく非難した。マルティはこの任務を組織的な内部テロという方法で果たしたが，その犠牲になったのは何百人という勇敢で献身的な戦士たちで，かれらはその個人的臆病さで悪名高かった男のもっとも笑うべき疑惑のために謀殺されたのであった（フランツ・ボルケナウ[240]）。

1937年中，ドリオは，スペイン内戦への独伊枢軸の干渉には口をつぐみつつも，スターリンのスペインへの「悪魔のような」干渉を告発しつづけた。同時に，スペインにおける共和派の勝利は，共産党の勝利に等しく，その不可避の結果として，フランスにおける共産主義の強化をもたらすであろうと強調した[241]。1938年7月には，ドリオは，スペイン問題にかんするかれの助言者のひとりクロード・ポプランを伴ってスペインを長期訪問し，フランコその他のナショナリスト派の指導者たちと会談し，かれらに非常な好感をもって歓迎された[242]。フランス人民党の政策は，このときには，明瞭にフランコの側に傾いていた。1938年8月26日には，『国民解放』紙は，スペインの地図にオーヴァーラップさせたフランコ将軍の写真を「スペインの解放者」という説明文をつけて掲載した。

ドイツにたいするドリオの態度は，フランス人民党第1回全国大会以来変わらず，かれは，演説のなかで，つぎのように力説した。「ヒトラーが達成させた革命はドイツにその権威，威信，自由，力のみならず，往年の破廉恥と軽率をすこしばかり取り戻させました。この民衆の国民革命は，あらゆる革命と同様に，その成果を誇っています・・・ナチスの政権掌握は，ボルシェヴィズムにたいする勝利，それよりはゆっくりとしてはいるが，しかし，それに劣らず決定的なドイツの古い伝統的勢力にたいする勝利，そして，先の大戦後締結された講和条約とその支持者にたいする平和的勝利だといえますが，フランスは，それに匹敵できるような重要な出来事をまったく実現してはいません。ヒトラーとかれの党がドイツの押しも押されぬ，そして，永遠の――とわたしは信じますが――統率者となったのは，このような3重の勝利の結果なのです。一般のドイツ人にとっては，ヒトラーはドイツの敗戦，ボルシェヴィズムによる国内の植民地化，社会的不正のすくなからぬ部分を忘れさせた人物なのです。ヒトラー体制の安定を確信するには，それだけで十分です。フランスで，ドイツからの亡命者にそそのかさ

---

239) J. Doriot, *ibid*., pp. 8, 86-87.

240) Franz Borkenau, *Der Europäische Kommunismus, seine Geschichte von 1917 bis zur Gegenwart*, Franke, Berne, 1952, cit. par D. Wolf, *op. cit*., p. 240, 平瀬・吉田訳, p. 290.

241) *L'Emancipation*, 16 janvier et 10 avril 1937 ; *L'Emancipation nationale*, 13 février, 6 mars et 24 décembre 1937 ; D. Wolf, *ibid*., pp. 240-241, 平瀬・吉田訳, pp. 245-247 ; J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit*., pp. 286-287.

242) V. Barthélemy, *op. cit*., pp. 136-137.

れて，ナチズムを打倒するには大砲を数発撃つだけで十分であると信じている人びとは，とんでもない間違いを犯しています[243]。」このような観察からドリオが引き出した結論は，ドイツと不可侵協定を結ばなければならないということであった。「最悪なのは，なにもしないことです。他の国だけにドイツやイタリアと交渉させておくことです。いま交渉しているのは，イギリスだけではありませんか。」

チェコスロヴァキアのズデーテン地方でズデーテン・ドイツ人党が自治権を要求し，紛争が起こったとき，ドリオは，チェコスロヴァキアがドイツとズデーテン地方のドイツ人少数派にかんする協定を締結するのが望ましいと考えた。しかし，もしヒトラーがチェコスロヴァキアを侵略したならば，フランスはこの小国の受ける領土侵犯に反対し，「全世界に同国の救援にかけつけるよう」提案すべきであると主張した。おそらくドイツは植民地をもちたがっているであろうが，その拡張能力を他の地域に向けさせることができるのではないか，とドリオは考えていた。かれは中国に言及し，「ヨーロッパが連合してひとつになれば，たぶん，日本が膨張を続けるのを食い止めることができ」，そして「ドイツ自身は，その植民地獲得欲をすこしは鎮めることもできそうな市場」をそこに確保できるのではないか[244]と考えていた。1936年以来，ドリオは，無尽蔵な人的潜在力をもつ中国は世界支配の鍵であり，スターリンが熱烈に中国に関心を抱くのも，そのためであると主張していた。このように，ドリオは，「この頃，かれの同胞や議会の同僚の政治的視野がヴォージュ山脈や地中海をやっと越えたばかりであったのに」，「非ヨーロッパ諸国の飛躍的発展への驚くべき感覚」（ディーター・ヴォルフ[245]）を示したのであった。

ドリオとフランス人民党が，中国進出をはかる「日本帝国主義に対抗して，白色人種の偉大な威信を回復する[246]」ために，「黄禍」を振りかざすキャンペーンをおこなったのは，ドイツの領土拡張欲を中国に向けようとしたからであった。ドリオによれば，ドイツの中国への帝国主義的進出に，フランスは全面的に賛成すべきであった。ドリオは，フランスの安全にたいして深刻な脅威となり，かれの考えでは，ソ連とフランス共産党を利するだけのドイツとの戦争を望まず，中欧や東欧へのドイツの勢力拡大も望んではいなかった。このため，フランス人民党は「平和主義」を信条としなければならず，同党には，イタリアのファシズムやナチズムの顕著な特徴であった好戦的価値観や他国への覇権拡張の野心は欠けていた。そして，このように，ドイツがその大国としての地位を維持することをフランスが保証するよう切望した点で，ドリオが体現したフランス・ファシズムは，第2次世界大戦におけるフランス敗北以前から，すでに対独協力的なファシズム，衛星的ファシズムであったといわなければならないであろう[247]。

ドリオの反ロシア感情が，ドイツの脅威のいちじるしい増大にたいして，かれの目を曇らせる結果になったことはまちがいない。しかし，スターリンのマキャヴェリズムに，また，フランスがなんらの軍事協定による補完もなしにスターリンと結んだ相互援助条約の完全な無意味さに大声で警告を発し，ソ連との同盟を無条件に拒否したからこそ，ディーター・ヴォルフも

243) J. Doriot, *Refaire la France, op. cit.*, p.89; D. Wolf, *op. cit.*, pp.272-273, 平瀬・吉田訳，p.272.

244) J. Doriot, *ibid.*, pp.60-62, 90-92; *L'Emancipation nationale*, 20 mars et 19 novembre 1937; D. Wolf, *ibid.*, p.273, 平瀬・吉田訳，p.272.

245) D. Wolf, *ibid.*, p.274, 平瀬・吉田訳，p.273.

246) P. Marion, *op. cit.*, pp.64-65; J. Doriot, *Refaire la France, op. cit.*, p.92; Philippe Conrad, *Le parti populaire français de Jacques Doriot*, mémoire de maîtrise présenté à l'Université de Paris I, 1969, p.268.

247) Philippe Burrin, *Fascisme, nazisme, autoritarisme*, Editions du Seuil, Paris, 2000, pp.234-236.

強調するように，ドリオは外交政策の一貫したプログラムをつくりあげることができたのである。当時のヨーロッパの政治的指導者たちの大部分が，共産主義的，ファシスト的あるいは国家社会主義的全体主義の実験を前にして，だれもが途方に暮れ，主要な敵が誰であるかを決定できなかった時代に，それはかなりの強みでもあったろう[248]。

自由戦線の結成問題にたいしては，ドリオはなお執着しつづけ，演説の最後の部分で，自由戦線の選挙戦術について説明している。かれは，フランス社会党（PSF）が，下院の補欠選挙でも，1937年10月の県会議員選挙でも，フランス人民党が呼びかけた単一候補を立てるという提案に答えようとはしなかったのにたいして，「今日から，われわれは，自由戦線への加盟を受諾した政党に共同の候補を指名するよう提案します。もしフランス社会党（PSF）が望むなら，われわれは，単一候補について，品位をもって平等な資格で議論します。もしフランス社会党（PSF）がそれを拒否するなら，われわれは，われわれの票を数えて，第2回投票では，もっとも有利な反マルクス主義候補のために立候補を辞退します。もしわれわれが首位にあるなら，われわれの候補を立てつづけます」とのべた[249]。しかし，党内には，フランス人民党がこのように自由戦線にあまりに深入りしすぎる結果，「右傾化」するのではないかと恐れ，それに反対論を唱えるものがすくなからずいたようであり，これにたいして，ドリオは，かれが「右翼と左翼との違いを重要視するには，あまりにも多くフランスの政治を生きてきた」と答えている[250]。「フランス人民党が切り開こうとしているのは，右翼でも左翼でもない，独自の道だ」といいたかったのであろう。

[248] D. Wolf, *op. cit.*, p.268, 平瀬・吉田訳, p.268.
[249] J. Doriot, *Refaire la France, op. cit.*, pp.124-125.
[250] J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit.*, p.289.

第2回全国大会のあと，ドリオはあらためてド・ラ・ロックに自由戦線結成の働きかけをしたが，これまで同様，無駄に終わった。まもなく，両党の関係は悪化した。1938年5月，アルジェで，フランス人民党とフランス社会党（PSF）の両党党員たちのあいだで深刻な紛争が発生し，フランス人民党政治局は，両党のあいだでおこなわれてきた提携交渉の失敗の責任をフランス社会党（PSF）になすりつける声明を発表した。これにたいして，フランス社会党（PSF）の党内速報では，ドリオはモロッコ独立戦争を率いたアブデル・クリムの元共謀者で，節操のない指導者だと非難された[251]。こうして，フランス社会党（PSF）は，フランス人民党によって「羽根をむしりとられる家禽」の役割を演じることなく，最後まで，フランス人民党の抱いた大望にたいして，無視できない障害物として立ちはだかり，広範なフランス・ファシズムの組織にいたりついていたかもしれない運動を阻止したのであった[252]。

ここで，スペイン内戦にたいするフランス人民党の態度に生じた変化を，あらためてみておきたい。最初，ドリオはスペイン内戦にたいし

[251] D. Wolf, *op. cit.*, pp.264-265, 平瀬・吉田訳, pp.265-266.
[252] 火の十字架団とその後続組織（フランス社会党PSFとフランス社会進歩PSF）については，木下半治『フランス・ナショナリズムの史的考察（1）』有斐閣，1958年，pp.435-469; 木下半治『フランス・ナショナリズム史（2）』国書刊行会，1976年，pp.16-62, 381-389, 517-574, 588-591; 竹岡前掲書，pp.803-899，第8章「火の十字架団とフランス社会党（PSF）」; 剣持前掲書；竹岡敬温「フランス・ファシズムと火の十字架団（1）（2）」『大阪大学経済学』第59巻第2号，2009年9月，pp.2-24，第59巻第3号，2009年12月，pp.320-345，「フランス社会党（PSF）の誕生と発展――極右同盟から議会政党へ――（1）（2）」『大阪大学経済学』第60巻第2号，2010年9月，pp.22-46，第60巻第3号，2010年12月，pp.28-49，「火の十字架団とフランス社会党（PSF）・再論」『大阪大学経済学』第60巻第4号，2011年3月，pp.23-51，「ヴィシー体制と“フランス社会進歩（PSF）”（1）（2）」『大阪大学経済学』第61巻第1号，2011年6月，pp.60-90，第61巻第2号，2011年9月，pp.16-36.

てフランス政府が非干渉政策をとり，中立的立場を維持するよう勧告し，『国民解放』紙は，スペイン共和国政府とフランコ派との両陣営によって多くの残虐行為が犯されているのを非難した。当時まだドリオの管理下にあったサン・ドニ市は，内戦を逃れてきたスペインからの亡命者を温く受け入れていた。しかし，フランス人民党は，同党がしだいに右翼の立場に踏み込むにつれて，共和国政府に反乱を起こしたフランコ将軍への支持をしだいに明確にさせていった。党内には，フランコに好意をもつ人物たちが多くいて，1936 年 10 月には，クロード・ポプランがフランコ派の反乱軍の「犠牲精神の回復と高揚した信念」をたたえた[253)]。

ドリオとかれの補佐役たちがフランコ将軍の大義に決定的に味方するようになるのは，フランス人民党が自由戦線の結成を提唱した頃であった。1937 年 4 月，ポール・ギタール（元『ユマニテ』紙記者）が，『国民解放』紙に，フランコ将軍の体制を支えたスペインのファランヘ党を「国民革命」の推進者とみなして支持を表明し[254)]，同年 9 月には，クロード・ポプランが同紙でフランコの「勝利 2 周年記念」を祝った[255)]。ドリオはこの 2 人よりは慎重な態度をとり，最初は，なおスペイン内戦にたいして中立的立場を尊重すると主張しつつ，ブルゴスのフランコ政権に大使を派遣するようフランス政府に要求しただけであった。しかし，既述のように，1938 年 7 月には，クロード・ポプランとともに，フランコ政権下のスペインの巡回旅行をおこない，フランコとも面会した。この旅行の結果，ドリオは「スペインの蘇生」を歓迎し[256)]，「アジア的野蛮にたいする文明の勝利」と呼んで，それを祝った[257)]。

イタリア外務省所蔵文書が暗示しているところによれば，ドリオのスペイン旅行は，フランスによるフランコ政権の外交的承認様式をフランコと交渉するために，外相ジョルジュ・ボネの代理として，密命を帯びておこなわれたようであった[258)]。こうして，ドリオのスペイン旅行の 4 か月後，ペタン元帥がマドリッド駐在のフランス大使に任命されたのである。フランス人民党の態度の変化を引き起こしたのは，たんにスペインで起こった出来事なのではなく，スペイン内戦を含む政治的空間内におけるフランス人民党自体の自覚的発展の結果であったということができよう。

5. フランス人民党の危機

1938 年 9 月 30 日，かねてヒトラーが要求していた，チェコスロヴァキア領ズデーテン地方のドイツへの割譲にかんする問題を調停するために，ミュンヘンに集まった英仏独伊の 4 国首脳は，チェコスロヴァキア政府にたいして，10 月 10 日を期限として，「ドイツ人の支配的な」同国領土からの撤退を強制する協定に合意し，調印した。英仏の譲歩は，ヒトラーの領土拡張政策を勇気づけただけであった。ズデーテン地方だけのドイツへの割譲を取り決めた協定は，ヒトラーの征服計画を一時的にしか阻止できず，チェコスロヴァキア全土の解体が急速に進んだ。1939 年 3 月 15 日，ドイツ軍はチェコスロヴァキアの首都プラハを占領し，ドイツはボヘミア，モラヴィアを保護領とした[259)]。ミュ

---

253) *L'Emancipation nationale*, 10 octobre 1936.
254) *L'Emancipation nationale*, 3 avril 1937.
255) *L'Emancipation nationale*, 24 septembre 1937.
256) *La Liberté*, 23 juillet 1938.
257) *L'Emancipation nationale*, 3 mars 1939.

258) Alessandra Giglioli, La question des subventions de l'Italie fasciste au Parti populaire français de Jacques Doriot d'après les archives du ministère des Affaires étrangères italien（1936-1939）, *Revue d'histoire diplomatique*, 112（2）, 1998, p.163.
259) ドイツ軍のプラハ占領とチェコスロヴァキアの解体について論じた邦語文献として，栗原優『第 2 次世界大戦の勃発――ヒトラーとドイツ帝国主義――』名古屋大学出版会, 1994 年, pp.570-572；綱川政則『ヨーロッパ第 2 次大戦前史の研究――イギリス・ドイツ関係を中心に――』刀水書房, 1997 年, pp.221-240 を参照のこと。

ンヘン会談後，このバイエルンの州都の名は，チェコスロヴァキアを放棄することによって，戦争の到来を引き延ばし，さらに，それを避けることができるのではないかという誤った幻想を指すものとして，きわめて象徴的な意味をもつようになった[260]。

このミュンヘン協定は，フランス人民党にとっても，きわめて深刻な危機の原因となった。

フランス人民党の機関紙のひとつ『自由』は，1938年夏，いちはやくチェコスロヴァキアの中立化を勧告し，危機を避けるために，チェコスロヴァキアに譲歩を促していた。同紙は，チェコスロヴァキア国家では２つの民族ブロックのあいだで亀裂が生じている事実を強調し，ベネシュ（1935－1938年，チェコスロヴァキア大統領）の不誠意を非難した。ベルトラン・ド・ジュヴネルは，８月初め，ズデーテン問題では，単純な「国境紛争」にすぎないものをイデオロギーが激化させているとして，それを大げさに騒ぎ立てることに反対した[261]。

ミュンヘン会談を間近に控えた９月11日には，『自由』紙は，平和にたいする２つの脅威として，ヒトラーの汎ゲルマン主義の圧力とチェコスロヴァキアのマルクス主義者の陰謀をあげた[262]が，ソ連がヒトラーの策謀を助けているとして，ヒトラーよりもモスクワがあやつる「戦争製造機」をいっそうつよく非難し，「汎ゲルマン主義を勝たせない最良の方法は，スターリンの手から血塗られたさいころを奪い取ることである」と結論した[263]。ドリオは，ズデーテン地方の混乱の責任を共産主義者になすりつけ，紛争解決のための国際会議の開催を要求した。そして，スイスのような連邦国家をつくるという「良識」を示すことができず，「かつては圧制に苦しんだが，いまでは圧制者となった」チェコスロヴァキア政府の責任を告発し[264]，1938年３月のフランス人民党第２回全国大会で展開した主張通りに，ズデーテン地方のドイツ人の政治的，文化的自治の原則を容認した。しかし，９月10日の『自由』紙では，ドリオは，チェコスロヴァキアを連邦国家につくりかえ，これに中立的地位をあたえることには賛意を表したが，ズデーテン地方のドイツ帝国への割譲という考えは退け，ドイツがチェコスロヴァキアを攻撃したときには，フランスは戦争に突入するかもしれないと書いた[265]。

９月12日には，ヒトラーは，ニュルンベルクにおけるナチ党大会できわめて激しい調子でおこなった演説のなかで，もしズデーテン地方のドイツ人が，チェコスロヴァキア政府の暗黙の了解の下で耐えがたい苦しみにさらされ，かれら自身の安全を確保できないならば，ドイツに任せてもらいたいとはっきり語った。その翌日の９月13日の『自由』紙に公表され，９月16日の『国民解放』紙に再録された論説のなかで，ドリオはこのヒトラーの脅しに関連して，「たとえ，いくらヒトラーがフランスとドイツとのあいだの国境問題は最終的に決着がついているとつよく主張し，ストラスブールの大聖堂はフランスのものだといったとしても，一般のフランス人は，ヒトラーが，最後には，条

[260] Yvon Lacaze, *L'opinion publique française et la crise de Munich*, Peter Lang, Berne, 1991, p.587.「ミュンヘン，それは力による決着を避けようと願って同盟諸国を犠牲にすることを意味し，侵略者が戦わずして手にした勝利に満足するであろうと考える幻想であり，抵抗とは正反対の宥和策であった。ミュンヘン的政策とは，今日では，道義的過ち，知的誤り，卑劣を意味し，のちに起こるべくして起きた戦争をいたずらに遅らせて，その傷を無為に広げたことを意味している」（レーモン・アロン）。Raymond Aron, *Mémoires, 50 ans de réflexion politique*, Julliard, Paris, 1983, pp.146-147, 三保元訳『レーモン・アロン回想録』みすず書房，1999年，I, p.156.

[261] Y. Lacaze, *ibid*., pp.171, 322.

[262] Claude Jeantet, L'Europe à la croisée de la guerre et de la paix, *La Liberté*, 11 septembre 1938.

[263] Paul Marion, La machine à fabriquer la guerre, *La Liberté*, 11 septembre 1938.

[264] *L'Emancipation nationale*, 9 septembre 1938.

[265] J. Doriot, Refaire la Tchécoslovaquie ou refaire la guerre, *La Liberté*, 10 septembre 1938.

約を破棄して，ライン川の境界を見直したいとおもうようになるだろうと考えている。それは現在の状況から全面的な悲劇をつくりだすことである」とのべ，「ドイツとその指導者たちは，よく理解しなければならない。もし，かれらがフランスはチェコスロヴァキアが攻撃された場合も戦おうとはしないと信じているならば，それは間違いである」とヒトラーに警告している。そのようにいいながらも，その数行あとで，ドリオは「ヒトラーは，平和主義的な道義的勝利を獲得することが可能であろう。それはズデーテン地方のドイツ人にたいする正義という勝利である」と書いて[266]，その攻撃の矛先を収めようとしている。ヴィクトル・バルテレミーは，このミュンヘン危機のとき，ドリオは「心底から，フランス・ファシズムの矛盾をつよく感じていた・・・9 月 13 日の論説は，この矛盾の結果であり，その証明である」と書いている[267]。

戦争が駆け足で近づいているようにおもわれた。9 月 23 日には，フランスは予備役軍人を召集し，イギリスは海軍を戦闘準備態勢につけた。9 月 28 日，民主同盟委員長ピエール・エティエンヌ・フランダン（1934 年 11 月－ 1935 年 5 月，首相）の「フランス国民よ，騙されるな！」と題した呼びかけが『自由』紙に発表された[268]。この呼びかけは，世論には不正確で不十分な情報しかあたえられていないことを非難し，「戦争を避けがたくするために，秘密組織によって数週間から数か月間かけてつくりあげられてきた巧妙なからくり」を告発し，平和を守ろうと望んでいるすべてのフランス国民は，大統領に宛てて戦争に反対する請願書を差し出すべきだ，と主張していた。フランダンの呼びかけを掲載した『自由』紙が内相の命令で没収されたので，フランス人民党は，この呼びかけをポスターやびらにして，パリやフランスのいくつもの大都市で配布したり，街の壁に貼りつけたりしたが，警察によって引き破られ，冬季競輪場での集会も禁止された。ディーター・ヴォルフによれば，フランダンの行為が「法的には非難できない」ものであったにせよ，「自国の著名な政治家が，世論は現在の紛争の原因について欺かれているとはっきりいうのを動員中の軍隊が聞いたとき，その影響はまことに困ったことにならざるをえなかった。このような観点からみれば，フランダンとドリオによって企てられた行動は，サボタージュを訴えるものであり」，フランダンの呼びかけを確実に広めようとしたドリオは，「ドイツにたいする“屈伏政策”の公然たる支持者であると非難された」のであった[269]。

フランス人民党の組織の下部においても，フランダンの呼びかけに似た行動が党員たちによってとられていた。ミュンヘン危機のさなか，ヴァール県連書記のアンリ・スーヴィルが，「われわれはチェコスロヴァキアのために死のうとはおもわない」と題したポスターをトゥーロンの街の壁に貼ったのである。ポスターは警察によって破られ，かれの行為は司法調査の対象になった。スーヴィルの事件は党政治局で熱心に議論され，ピュシューの反対にもかかわらず，結局，政治局はスーヴィルを支持し，その決定は，「政治局は決定した」というタイトルの下に，9 月 23 日の『国民解放』紙に公表された[270]。

ミュンヘン協定は調印された。ドリオとフランス人民党にとっては，ソ連を除外して西欧 4 国間だけで調印され，ソ連を怒らせたミュンヘン協定は，「われわれの勝利[271]」であった。『国民解放』紙は，安堵のため息をつき，「われわ

[266] P. Hollemart, *op. cit*., pp. 80 - 81.
[267] V. Barthélemy, *op. cit*., p. 140.
[268] Pierre-Etienne Flandin, Peuple français, on te trompe! *La Liberté*, 28 septembre 1938.
[269] D.Wolf, *op. cit*., p. 281, 平瀬・吉田訳，p. 278.
[270] V. Barthélemy, *op. cit*., p. 142 ; P. Hollemart, *op. cit*., p. 81.
[271] *La Liberté*, 1er octobre 1938.

れは危うく難を逃れた。いまこそ決着をつけなければならない。わが国から戦争の党を追い払わなければならない[272]」と書いた。「戦争の党」とは，共産党のことであった。しかしながら，「われわれの政策の勝利」のはずであったミュンヘン協定は，反対に，フランス人民党を深刻な危機に引きずり込むことになった。

党内からの批判の的となったのは，ミュンヘン危機にさいして最終的にドリオがとった「敗北主義」の路線であった。先述のように，ドリオは，もしドイツがチェコスロヴァキアを攻撃したときには，フランスは戦争をも辞さないかもしれないと主張した（1938年9月10日，9月13日の『自由』紙，9月16日の『国民解放』紙）が，しかしながら，実際には，この主張は，9月15日，ベルヒテスガーデンで，基本的にヒトラーのズデーテン割譲要求を確認した，イギリス首相チェンバレンとヒトラーとの会談をドリオが歓迎したように，妥協への同意に門戸を閉ざしてはいなかった。ドリオには，「ドイツ人とチェコ人との共存」が，いまでは「平和にとって絶え間ない危険」となっているとおもわれた[273]。それでも，なお，かれは，ドイツの暴力のおどしの前に，同盟国を放棄することがフランスにとって敗北を意味するということを認めていた。

このように，ミュンヘン危機が深まるにつれて，ドリオはドイツにたいする強硬政策と屈服政策とのあいだで揺れ動き，かれが公然と「平和の党」の陣営に加わったのは，危機がその頂点に達してからであった。ドリオに惹きつけられ，かれに賛同して集まった知識人たちは，この決定的な日々におけるかれらの偶像のしばしば矛盾した，煮えきらない態度に幻滅した[274]。

9月23日，『国民解放』紙は，第一面の大見出しに，「フランスは犠牲を払う。しかし，この後退を最後にすべきである」との文章をかかげた。社説では，ドリオが，この「後退」はフランスにとって「重大な敗北」であるとしながらも，それは「最悪の条件で始められる戦争よりはよい[275]」と断言した。9月22－24日，チェコスロヴァキアにズデーテン割譲を無理やり承諾させたチェンバレンがバート・ゴーデスベルクでヒトラーとおこなった2度目の会談で，ヒトラーがズデーテン地方の即時占領と10月1日までのチェコ軍の撤退という新しい要求をしたのにたいして，英仏政府が態度を硬化させた[276]とき，ドリオは，「つまらない問題」が「ヨーロッパを戦争に引きずり込む」危険があり，それは「あまりにも愚かな」ことだとのべて[277]，再度の「後退」を平然と容認した。

こうして，フランス人民党の機関紙は「平和主義」のキャンペーンを開始し，キャンペーンは，9月28日の『自由』紙が「フランス国民よ，騙されるな！」というフランダンの呼びかけを発表したとき，頂点に達した。ミュンヘン会談が終わったとき，ドリオは，『国民解放』紙に，同会談によって，ナショナリズムが「平和の敵」ではないことが証明されたと書き，いまや，「戦争の党を国内から追い払う[278]」ために，右翼と左翼の平和主義者を結集しなければならないと主張した。かれはミュンヘン会談によってフランス以上にソ連が被害を蒙ったことに満足し，10月2日の『自由』紙に掲載した論説には「みなが大喜びしたなかで，モスクワ

[272] J. Doriot, Chasser de la nation le parti de la guerre, *L'Emancipation nationale*, 30 septembre 1938.

[273] J. Doriot, Le moment est venu d'aborder franchement le problème du statut prochain de l'Europe dans une conférence des puissances occidentales, *La Liberté*, 16 septembre 1938.

[274] D.Wolf, *op. cit.*, pp.278-283，平瀬・吉田訳，pp.276-279.

[275] J. Doriot, L'Allemagne et nous, *L'Emancipation nationale*, 23 septembre 1938.

[276] 栗原前掲書，pp.454-458.

[277] J. Doriot, Le dernier mot appartient à Prague, *La Liberté*, 25 septembre 1938.

[278] 注272）

だけが怒った」という題をつけた[279)]。

しかし，このようにミュンヘン危機のあいだ左右に揺れ動いたドリオの態度は，フランス人民党の党内にくすぶっていた危機感を浮上させた。

ミュンヘン協定が調印された9月30日の『国民解放』紙で，ドリオは，ミュンヘン協定は理性の勝利ではあるが，しかし高くついた勝利であるとみなし，ヒトラーが戦争賛成派の正体をあらわしたといい，ヒトラーは「正当とみなされる要求を満足させることはできたが，しかし，それだけにとどまらず，ヨーロッパにたいするドイツの覇権を拡大する」つもりであると書き[280)]，そのためにはヒトラーが戦争を辞さないということを理解するだけの判断力を失わずにいた。それでもなお，その後も，ドリオとフランス人民党は，ドイツとの協調を信じつづけた[281)]。

ミュンヘン協定について，ドリュ・ラ・ロシェルは，「ここまではよい，しかし，これ以上はいけないと」と警告し，さらに，「ヒトラーはオーストリア国民に要求する権利をもっているし，ズデーテン人にたいしては，なおのこと，その権利をもっている。しかし，権利は，それが人間的に行使された場合にしか承認できない。権利の行使を強奪に変えることはできない」との意見をのべた。しかし，かれはその後すぐに考えを変えたようであった。10月14日，かれはミュンヘンから帰ったダラディエ首相に宛てた公開書簡を公表したが，そこには「あなたはミュンヘンからわれわれの恥辱をまとって帰ってきた」との言葉があった[282)]。

ドリオは，党内で，とりわけ政治局のなかであきらかになりつつあった意見の対立に気づき，かれに向けられているように感じた敗北主義への非難をそらそうと考え，10月7日の『国民解放』紙に「党首のメッセージ」を発表し，それに添えてチェコスロヴァキア危機の経緯をのべ，危機進行中にフランス人民党がとった立場を説明した，「フランスはチェコスロヴァキアを裏切らなかった」と題する2ページの論説を掲載した。さらに，同紙10月14日号も，紙面をこの同じ問題に割いた[283)]。

ところが，10月15日と16日に開かれたフランス人民党全国評議会が，党首にたいする激しい批判のきっかけとなった。ドリオは比較的短い演説をおこない，フランスは軍事的破局を避けるために，外交的譲歩を受け入れざるをえなかったのであり，今後は，こうしてえられた猶予の時間を利用して，精力的に軍備を強化しなければならないとのべた[284)]。ヴィクトル・バルテレミーの証言[285)]によれば，ドリオの演説のあと，最初に発言を求めたのは，ベルトラン・ド・ジュヴネルであった。かれの父アンリ・ド・ジュヴネルは在チェコスロヴァキア大使で，ベネシュ大統領の友人であったが，かれ自身もチェコスロヴァキアに何度も滞在し，ミュンヘン危機のときはプラハにいた。バルテレミーによれば，「かれは，プラハの街では群衆がフランスにたいして敵意の感情をむきだしにし・・・フランスの国旗が引きちぎられ足で踏みつけられるのをみた。きわめて真剣で強い感情のこもったかれの品位あるスピーチに聴衆は理解を示し，深い沈黙のなかで聞き入っていた。政治局のテーブルで，ドリオはあきらかに動揺していた。」

ついでピエール・ピュシューが発言し，かれは，「きわめて綿密な資料を使って，ズデーテン地方のドイツへの併合の結果，フランスが経済的分野で被る損失の重大さを示し，さらに同様な方法で，フランスの外交姿勢の弱体化につ

279) *La Liberté*, 2 octobre 1938.
280) *L'Emancipation nationale*, 30 septembre 1938.
281) *La Liberté*, 6 décembre 1938 ; *L'Emancipation nationale*, 9 décembre 1938 ; Ph. Conrad, *op. cit.*, pp. 321-322.
282) D.Wolf, *op. cit.*, pp. 281-282，平瀬・吉田訳，p. 278.
283) V. Barthélemy, *op. cit.*, p. 142.
284) D.Wolf, *op. cit.*, p. 283，平瀬・吉田訳，p. 279.
285) V. Barthélemy, *op. cit.*, pp. 143-144.

いて証明した。」ピュシューの発言にたいしては，多くのメンバーがかれの主張に反対する発言をおこない，そのひとりアンリ・バルベは，軍事的，経済的能力の乏しい状態のフランスが戦争のイニシャティヴをとるのは，自殺行為であると指摘した。

翌日の会議では，クロード・ジャンテらがフランス人民党のとった立場を精力的に擁護した。ついで，ドリオが前日のド・ジュヴネルとピュシューの発言に答えて長いスピーチをおこない，あらためてミュンヘン危機とフランス人民党のとった行動についてその経緯を語り，共産党議員を除く国会議員すべてがミュンヘン協定を承認したのと同様に，ほとんどすべてのフランス国民が同協定を平和の勝利として歓迎したことを強調し，それでもなお戦争しなければならないとしたら，フランス人民党の党員も戦場でかれらの義務を果たさなければならないであろうとのべた。ドリオの演説は，会議出席者の満場一致の（とおもわれた）承認をえた。

党内の危機は避けられたかにみえた。しかし，そうではなかった。

「つづいて開かれた政治局の会議のあいだ，ピュシューは，前日と同じ論拠を用いて，ふたたび攻撃を始めた」とヴィクトル・バルテレミーは続けている。「さらに，かれは2つの苦情をつけくわえた。ドリオの私生活――かれはそれを放埒だといった――とイタリアから資金援助（チアーノ伯爵からヴィクトル・アリギに渡されている金）を受けていることについての苦情である・・・しかし，この2つの論拠は，ドリオ自身と政治局によって却下された。」しかし，12月2日のつぎの政治局の会議のとき，またもやピエール・ピュシューは，全国評議会のときドリオにたいして表明された批判にひどく動揺していたポール・マリヨンを味方につけて，フランスに領土返還を要求するイタリアの挑発に反駁できないフランス人民党の弱腰を非難した。ミュンヘン会談以後，ムッソリーニは外交政策をはっきりと反フランスに転じ，領土返還要求の意志をあきらかにした。1938年11月30日，フランスの大使が招かれたイタリアの国会で，外相チアーノがその演説のなかで「イタリア国民の本能的渇望」に言及したとき，イタリアの議員たちは「チュニジア！ジプチ！コルシカ！」との叫び声でチアーノの演説を中断した。この上層部からけしかけられた意志表明の翌日，ファシスト党機関紙はこの返還要求にニースとサヴォワの名を追加し，同日，ムッソリーニは，かれ自身が議長をつとめる最高諮問機関，ファシズム大評議会の前で，この領土拡張計画の原文を一字一句違えずに繰り返したのであった。

フランスにたいするイタリアの領土返還要求があきらかになったとき，ドリオは，イタリアの要求の領土的側面については断固として拒否する一方で，ジプチ，スエズ，チュニジアなどのいくつかの地域におけるフランスの権益にかんしては，調整を認めるような態度を示した[286]のであり，この妥協的な態度が，ピュシューたちの批判を激化させ，両者の関係断絶を早めたのであった。こうして，ドイツの攻撃的意志とイタリアの尊大な要求が明確になったときから，「敗北主義」の路線を維持するのは困難となった。

党内危機は，1939年1月に頂点に達した。政治局の会議で，ピエール・ピュシューは非難を繰り返した。かれは，外交政策の分野でフランス人民党がとってきた姿勢に反対して，ミュンヘン協定がドイツの脅威にたいしてフランスを弱体化するものであり，ドリオはズデーテン地方のドイツへの割譲にもっとつよく反対すべきであったと主張して，ミュンヘン協定の承認に反対する議論を展開し，フランス人民党の「非妥協的ナショナリズム」を裏切った党首を容赦なく攻撃した。さらに，かれはドリオの私

[286] J. Doriot, Les revendications italiennes, *La Liberté*, 5 décembre 1938.

生活を批判[287]し，イタリアからドリオが受け取り，個人的な快楽にも使用していたとおもわれる秘密資金の問題を追求して，資金援助とドリオのミュンヘン協定支持との関係をほのめかした[288]。

ドリオにたいする批判は日増しに激しくなり，ドリオの味方には，クロード・ジャンテらの無条件「敗北主義者」や，1934 － 1935 年の共産党との関係断絶のとき，かれとともに脱党したサン・ドニの古い仲間たちだけしかいなかった。ポール・マリヨンも「これ以上，臆病者の党のメンバーであることは望まない」と言明し，ロベール・ルーストー，イヴ・パランゴー，ヴィクトル・アリギ，ジャン・フォントノワほか幾人もの政治局メンバーが同様の批判を表明し，かれらはまもなくフランス人民党を離党した。

かれらに先んじて，ミュンヘン会談直後の前年 10 月に，ドリュ・ラ・ロシェルとアルフレッド・ファーブル・リュスが，ミュンヘン協定を承認したドリオの態度に失望して，ひそかに党を去っていた。ドリュ・ラ・ロシェルは，1939 年 1 月 6 日に，ドリオに「あなたはわれわれを裏切った。あなたはフランスを救おうとは望まなかった[289]」と書いた離党の通知状を送ってきた。クロード・ポプランやベルトラン・ド・モーデュイは，離党はしなかったが，以後，党活動に参加しなかった。

こうして，フランス人民党はその首脳部の多くの卓越したメンバーを一時に失ったのであり，その打撃は重大であった。とりわけ，フランス人民党とその主要な資金提供者との仲介役をつとめていたピエール・ピュシュー――この大企業の代理人は，フランス人民党が「戦争の党」に加担することを率直に要求した――の離党は，多額の資金援助の停止を引き起こし，同党をたちまち深刻な財政難に陥らせた[290]。フランス人民党は，思想上のリーダーたちと資金源を同時に失ったのであった。

フランス人民党中央財政委員会の経理主任エミール・マッソンが，1945 年に逮捕されたあと，フレーヌ刑務所でおこなった証言にもとづいて作成された「マッソン関係書類」によれば，同委員会からドリオの手元に渡された金額は 1937 年には 436 万 7,000 フラン，1938 年には 571 万 3,000 フランにのぼったが，1939 年には 159 万 3,000 フランに減少[291]，また，1941 年 5 月のフランス人民党全国大会に提出された報告を信じるならば，1938 年にはおよそ 500 万フランであったフランス人民党の収入総額は，1939 年には 120 万フランに減少している[292]。その影響はただちにあらわれた。1939 年 1 月 13 日から，『国民解放』紙の発行部数は半分に減らされ，同年 5 月には，日刊紙『自由』――その発行費用は党の財政状態をいちじるし

[287] ピュシュー，マリヨン，ドリュ・ラ・ロシェルたちは，ドリオが娼婦とつきあい，美食にふけって太りすぎ，フランス人民党のリーダーにとって必要な最小限の禁欲生活を受け入れるのを拒否したことを非難した。ドリュ・ラ・ロシェルにとっては，かつてのドリオこそ，太って「腹の突き出た知識人」とは正反対の「筋骨たくましい人物」なのであった。フランス人を腹のへこんだ強健な兵士に変える人体の革命としてのファシズムを賞揚したマリヨン，ド・ジュヴネル，ドリュ・ラ・ロシェルたちにとっては，ドリオの肉体的「堕落」はこの理念にはなはだしくそむくものであった。R. Soucy, *op. cit.*, pp. 243 - 244,（traduction française）*op. cit.*, pp. 342 - 343 ; Pierre Drieu La Rochelle, *Chronique politique 1934-1942*, Gallimard, Paris, 1943, p. 54.

[288] P. Pucheu, *op. cit.*, pp. 130 - 140 ; Jacques Doriot, Souvenir sur Pucheu, *Le Cri du Peuple*, 22 mars 1938 ; Ph. Burrin, *La dérive fasciste. Doriot, Déat, Bergery 1933-1945, op. cit.*, pp. 301 - 302 ; J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit.,* pp. 292 - 296.

[289] Cit. par Dominique Desanti, *Drieu La Rochelle ou le séducteur mystifié*, Flammarion, Paris, 1978, pp. 342 - 343.

[290] D.Wolf, *op. cit.*, pp. 212, 280, 286，平瀬・吉田訳，pp. 218, 277, 282.

[291] D. Wolf, *ibid.*, p. 211，平瀬・吉田訳，pp. 216 - 217, 232 - 233 ; J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit.*, p. 236.

[292] 1941 年 5 月 24 - 25 日のフランス人民党全国大会にかんする警察庁の一報告のドイツ語訳。Ph. Burrin, *La dérive fasciste. Doriot, Déat, Bergery 1933-1945, op. cit.*, p. 306.

く悪化させていた――が姿を消した。同じ時期，党本部の電話線が料金不払いが理由で切られている[293]。

1938年には，もうひとつの事実がフランス人民党の急速な衰退を引き起こした。人民戦線の崩壊である。それは人民戦線の勝利におびえたブルジョワジーのパニックを静め，「共産主義の危機」を遠ざけ，そのため，財界の有力者たちはその献金を出し惜しみするようになった。人民戦線の幕引役をつとめることになった第3次ダラディエ内閣の成立（1938年4月10日），労働総同盟（CGT）の呼びかけた1938年11月30日のゼネストの失敗，国際的危機の高まりがフランス国内に生み出した一種の「神聖連合」のムード，これらすべてが反体制的急進主義の政治団体に味方しなかった。

マルセイユでも，1939年までには，フランス人民党結成当初からの中産階級の支持者たちは，もはやかれらが必要としなくなった同党を見捨てた。1936年夏以後には「政治的不安がとりわけ中産階級と右翼政党のなかで大きくなり，かれらの世界では，もっぱらフランスが流血の革命に向かって大股で進んでいるとのうわさが流れている」と警察が報告している（1937年3月）ような，中産階級をとらえた共産主義の現実的恐怖を利用して，フランス人民党はマルセイユでその勢力を急速に拡大することができたのであった。「しかし，1938年と1939年には，大多数の選挙民は，おそらく，フランス人民党が架空の敵と戦っているのだと考えたことであろう。郡選挙における共産党の得票数の減少，1938年4月のダラディエ内閣の成立，その後のダラディエ内閣と人民戦線との最終的な関係断絶，1938年11月のゼネストの失敗，メーデー参加者の――1937年2万5,000人から1938年の1万3,000人，1939年の4,000人への――急速な減少など，現実であれ想像であれ，大きな変化のきざしは，同党の影響力を失わせたのである」（ジャンコウスキー[294]）。こうして，1938年，ダラディエ内閣が人民戦線を捨て，中道右翼勢力と同盟し，人民戦線の解体が決定的となったとき，フランス人民党はその主要な「存在理由」を失ったのであった[295]。

クロード・ポプランの回想録によれば，ミュンヘン協定調印よりまえの1938年9月以前から，フランス人民党の若干の幹部たちは，同党の将来にたいして大きな不安感にとりつかれていたという[296]。ドリオに反旗をひるがえしたものたちの行動の動機はさまざまであったが，全体としてみれば，危機はフランス人民党の将来にたいするかれらの信頼喪失に起因していたのであったろう。サン・ドニを失って以来，フランス人民党の政治的挫折があきらかになっていたが，対外政策の路線をめぐる党内の対立がその挫折を白日のもとにさらしたのであった。

ポール・マリヨンとヴィクトル・アリギが1939年1月にドリオに送った離党の通知状と，「ジャック・ドリオとポール・マリヨンとの不和を調査担当する委員会メンバーの同志たち」に宛てたポール・マリヨンの手紙が，パリ警視庁文書館に保管されている[297]。それによると，マリヨンとアリギはフランス人民党の対外政策に疑問をもち，とくにマリヨンは，ドリオ宛ての手紙で，「ミュンヘン会談後の汎ゲルマン主義の圧力を前にした君の反発の弱さを知って，困惑がしだいに大きくなりました。第2回党大会で君が賛美し，そして，わたしの心のなかに

---

293) *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 1945, rapport du 8 mai 1939.

294) P. Jankowski, *op. cit.*, p. 62.

295)「1938年夏から秋にかけて，人民戦線は存在を終えようとしていた。共産主義の危険は消え去ったわけではないが，その危険の重大性はいちじるしく減じていた・・・したがって，フランス人民党は不用になったようにおもわれた」とヴィクトル・バルテレミーも書いている。V. Barthélemy, *op. cit.*, p. 147.

296) C. Popelin, *op. cit.*, p. 125.

297) *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 341, dossier 8310-1, B/a 337, dossier 2 ; J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit.*, pp. 295-297.

いまも生きているあの“非妥協的ナショナリズム”は，いったいどこにいったのか。僕は君に深く傷ついたフランスの自尊心の奥底からの憤りと激高の叫びを期待していたのに，この最近の数か月，君は老いた共和国の用心深い大臣のように話したり書いたりしている」と党首を非難していた。ヴィクトル・アリギのほうは，かれがチュニスにいたまさにそのときにかれの権限を縮小させて，北アフリカにおけるかれの方針をドリオが否認したことを非難し，また，イタリアの領土返還要求にたいしては，「非妥協的ナショナリズム」によって対決すべきではないかと主張していた。

ついで，2 人はドリオの日和見主義やスターリン的性格を非難していた。「政治行動の面で君の経験が挫折したのは，君が最善から最悪にまで揺れる長期にわたって続いた駆け引きに身を投じたからであり，その君のジグザクな行動は，多くの場合，君が考えていることをいわず，君がいっていることをほとんど実行しないで，状況をいっそう悪化させたという事実から生じているのです。教義と綱領を君は余計なものと考えている。そして，たいていの場合，君の日和見主義がそれらに優先しているのだ。要するに，現在，君がどこにいくのか，もはやだれにも分からないのです」とアリギは書いていた。また，マリヨンは，「君の部下全体，とりわけ君の協力者との関係のスターリン的性格」を批判し，「だれも，品位を落とさずに我慢しつづけることができないような，きわめてスターリン的なやり方（分裂，策略，真実を歪曲する激しい口論，好意的な批判を不可能にしてきた狂暴で陰険な反応）が，党と国との最優先の利益の名においてもとられてきた」と非難していた。

さらに，2 人の離党者はドリオの「党首」としての欠陥を数えあげ，アリギは「わたしはひとりの指導者の命令の下でわたしの国に奉仕したかったのだが，君がその指導者ではないことに気づいた。それなのに，君は君自身を指導者と自認するという嘆かわしい勇気をもっていた」といい，マリヨンは「われわれの運動の絶対的信念，詩魂，英雄的行動，宗教的性格，これらすべては君にとっては空疎で唾棄すべきもののようだった。しかし，わたしには，それらはたたかうためには欠かすことのできない重要な理由であった」とのべ，ドリオが「フランス人民党を指揮するために必要な，最小の緊張と禁欲生活を受け入れるのをいつも拒否した」ことを非難していた。そして，「しかも，君は，観念したようにはっきりと，“わたしは君たちが考えているような意味での指導者ではない。わたしはただの男にすぎず，偶像になるという口実をつくって，わたしの習慣や生活様式を放棄するようなことはしない。偶像などというのは君たちが勝手にまちがってつくりあげたものであり，今日では，君たちはそれを破壊しているのだ”といったではないか。それは，君が，フランス再生の党を指揮することと切り離せない，犠牲と栄誉を受け入れるのを望もうとはしなかったことを率直に認めた言葉だった」と辛辣に批判していた。

ファシストの「指導者」は，その側近にたいしてさえも，「鎧」や「聖人伝」で身を固めた「偶像」でなければならず，そのようになろうと細心の注意を払わなければならないのであろうか。もしそのようなことがファシストの「指導者」の資質ないし条件として要求されるならば，ドリオはファシストの「指導者」ではなかった[298]。ドリオは，かれの協力者たちにたいしても，その他の多くの部下たちにたいしても，その人間的弱さを隠そうとはしなかった。

ドリオの私生活にたいする非難については，ヴィクトル・バルテレミーの目には，「それらの非難を口にした人びとにとっては，それは本気の理由というよりは，口実にしかすぎない」

---

298) J.-P. Brunet, *ibid.*, p. 297.

ように映った。そして，バルテレミーは，「それらの非難が全部あるいは一部本当であったにせよ，高等師範学校出身のピュシューのような人物は，歴史上，私生活が偉大な政治家になる妨げにはまったくならなかった人物が無数にいるということを忘れてしまうには，あまりにも歴史をよく知っているのではないか」と書いている[299]。

ドリオの習慣と生活様式に変化が起こったのは，1937年末から1938年初めにかけての頃であった。1938年2月13日の警察報告は，この変化がドリオの取り巻きたちのあいだに呼び起こした驚きに注目している。それまでドリオは，政治活動以外の時間を家族と共にいることに当てていたのにたいして，この頃以後は，党本部の建物のなかにつくらせた住居を使用し，レストランで食事をとり，気前よく金を使い,「かれが代議士でサン・ドニ市長であったとき受け取っていた手当をもらわなくなって以後，むしろいっそう多くの金を使うようになっていた[300]。」市長の職を罷免された結果，自由な時間が多くなっただけでなく，この事件がドリオをひどく落胆させ，さらに，自由戦線結成の提案がほとんど失敗に終わったために，フランス人民党の活動が沈滞したことへの失望が，ドリオの気持をたるませてしまったのであろうか。

それ以来，ドリオは快適で贅沢な生活に楽しみをみいだしたようであった。かれは高級なレストランに通い，そこで上等のワインや極上の料理を賞味し，側近や友人たちと一緒に，かれの多食症を満足させた。かれは通常レストランで3時間も過ごし，文字通り料理をむさぼり食った，とベルトラン・ド・ジュヴネルは語っている[301]。その結果として，ドリオは肥満症になった。1939年11月のフランス人民党の集会のときに撮られた写真[302]では，ドリオの巨大な上半身が演壇の後ろの背景いっぱいを覆っていて，ほとんど正面から撮られたそのドリオの写真は，見るからに脂肪ではちきれそうで，頬は醜くふくらみ，二重顎が重たげにたれさがっている。肥満症は，おそらくドリオの活動の挫折の明白な兆候でもあったろう。アルフレッド・ファーブル・リュスがつぎのように書いている。「ポール・マリヨンがのちにわたしに語ったところによれば，ドリオの運動が発展している数か月のあいだ，かれは変わった。かれは，かれ自身に託された希望の高みにまで，精神的に向上しようと真剣に努力していた。流れが逆になったとき，かれは売春宿で自分を慰めるようになった[303]。」初期の禁欲主義は，もはや遠い思い出でしかなかった。

しかし，1938年末から1939年初めにかけての党内危機自体は，フランス人民党にその深部にまでダメージをあたえはしなかった。離党した幹部たちはそっと姿を消し，かれらの離党は党下部にまで通達されなかった。この間，ドリオは，しばしば地方の集会に呼ばれて，遊説旅行を続けることができた。この時期のフランス人民党の困難は，それよりも，国内外の一般的状況の変化に起因していた。

戦争の危機が高まり，国家の権威確立の必要が感じられつつあった政治状況のなかで[304]，

---

299) V. Barthélemy, *op. cit*., p.147.

300) *Archives de la préfecture de police de Paris*, B/a 341, dossier 8310-1, pièce du 23 février 1938,《Information PPF》.

301) 1984年5月3日のジャン・ポール・ブリュネとの対談のなかで。J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit*., pp.298, 530.

302) この写真はMax Gallo, *Cinquième colonne*, Plon, Paris, 1970に複製掲載されている。

303) Alfred Fabre-Luce, *Vingt-cinq années de liberté*, I *Le grand jeu (1936-1939)*, Julliard, Paris, 1962, p.158.

304)「ダラディエとその政府は，国中でつよく感じられていた権威強化の一般的必要を，かれらの利益になるように，巧みに取り込むことを知っていた。その結果，首相個人に，きわめて異例な一種の責任の集中が起こった。Gille Le Béguec, L’ évolution de la politique gouvernementale et les problèmes institutionnels, in René Rémond et Janine Bourdin, *Edouard Daladier, chef de gouvernement*, Presses de la Fondation Nationale des Sciences Politiques, Paris, 1977, p.56.

1938 年 4 月，首相ダラディエは法律並みの効力をもつ政令（デクレ・ロワ）の公布権――全権――の委任を求め，それ以後，全権は何度も更新され，第 2 次世界大戦勃発に先立つ 1 か年半のあいだ，フランスの国会はその立法権をほとんど政府に引き渡した。ダラディエは，1939 年 7 月 29 日の政令によって，下院の任期の 1942 年 6 月までの延長を決定し，立法権を事実上消滅させて行政権を強化させた結果，一部の政党――とりわけ，早期の選挙実施を望んでいたフランス社会党（PSF）――からは独裁者の先駆けと非難された。このような「挙国一致」の政治状況のなかで，フランス人民党は不要な右翼政党とおもわれ，その激しい反マルクス主義のために，戦争になった場合に必要な挙国一致にとって障害になるかもしれない，厄介な政党とみなされたのであった。

ミュンヘン協定に反対した唯一の政党，共産党は急速に弱体化し，週 40 時間労働法に重要な修正を加えた政令の公布に反対するために労働総同盟（CGT）が決定した 1938 年 11 月 30 日のゼネスト――その根底には，ミュンヘン協定への反対があった――は惨憺たる敗北に終わった[305]。

週 40 時間労働法を事実上廃止するに等しいほど大きな修正を加えた政令は，第 3 次ダラディエ内閣の穏健右翼の閣僚ポール・レノー財務相を中心にして作成され，1938 年 11 月 13 日に公布された。週 40 時間労働法が工業生産の拡大を妨げていると考えていたレノーが同法にもたらした修正措置によって，労働者たちは直接的な被害を受けた。超過勤務の承認手続きが容易になり，超過勤務手当の割増し率が引き下げられ，超過勤務を拒否したものにたいする罰則が定められた。レノーが「週 2 日の日曜」と呼んでいた週 5 日制が禁止され，労働時間は，以後，週 6 日に配分されることが原則となった。有給休暇は，工場閉鎖を引き起こしてはならなかった。ドリオは，フランスの生産回復と軍備増強へのポール・レノーの並々ならぬ配慮に理解を示しながらも，かれの政令が労働者の心理をよく把握していないと批判し，根本的な社会改革が実現されないかぎり，労働者階級は共産主義の影響下に放置されたままになるであろうと主張した[306]。

1939 年 3 月 15 日，既述のように，ヒトラーはミュンヘン協定を破り，軍隊をチェコスロヴァキアの首都プラハに侵攻させた。このプラハ占領は，ドイツの領土要求がドイツ語を使用する少数民族の土地に限定されず，東ヨーロッパ全体をねらう帝国主義的性格のものであることをあきらかにしたという意味で重大であった[307]。ドリオはただちにヒトラーの行動の重大性を指摘し，それまでヒトラーはその前任者たちが調印した条約を破っただけであったが，「今日，ヒトラーが否認したのは，かれ自身の署名である・・・この事実はきわめて重大であり，かれはドイツとの協力と友好のいっさいの可能性を否定してしまったのである。いまや当然のことながら，すべての国がドイツ帝国の態度におびえている」とのべた。そして，ドリオは，ミュンヘン会談直後に，ドイツとそのすべての隣国との国境を保証する協定をヒトラーに調印させよう――もしヒトラーがそれを拒否したならば，その行為によって，かれは侵略の意志を証明したことになろう――というかれの提案をフランス政府がとりあげなかったことを遺憾とし，「フランスの安全は，われわれがイタリアとスペインとの友好関係を取り戻したとき

---

305) 竹岡前掲書，pp.417-448，第 11 章「週 40 時間労働法の修正と経済活動」.

306) *L'Emancipation nationale*, 25 novembre 1938；D.Wolf, *op. cit.*, p.287，平瀬・吉田訳，p.282.

307) プラハ占領は，チェコスロヴァキアの全面的解体をもくろんでいたにもかかわらず，英仏の介入によって妥協せざるをえなかったミュンヘン会談を外交的失敗とみなしたヒトラーの，「ミュンヘン協定にたいする復讐」であった。栗原前掲書，pp.454-456，459-460，570-572；竹岡前掲書，p.532.

にはじめて保証されよう」と主張した[308]。

こうして，1939年3月15日のドイツ軍のプラハ占領が転換点となり，以後，フランス人民党は，対独強硬政策に転じ[309]，戦争が勃発した場合には，いつでも党員たちがかれらの義務を果たす用意ができていると主張した。1939年5月12日には，フランス人民党は前例のない盛大な儀式でジャンヌ・ダルク記念祭を祝い，5月19日の『国民解放』紙は，ジャンヌ・ダルクに敬意を表する行列を先導したドリオが「在郷軍人団体や・・・尊敬すべき偉大な指導者シャルル・モーラスが統率するアクション・フランセーズの王党派の活動家たち」からの拍手喝采を浴びたことを報じ[310]，その翌月には，同紙は，「完全ナショナリズム」の理論家シャルル・モーラスがアカデミー・フランセーズ会員に選出されたことを盛大に祝った。さらに，ドリオは，カトリックの聖地ルルドへの巡礼を思い立ち，フランスの非キリスト教化につよく反対し[311]，『国民解放』紙はフランスでもっとも国粋主義的な新聞のひとつとなった。

1938年末から1939年初めにかけての幹部の大量離党がもたらした重要な結果のひとつは，フランス人民党の伝統主義の側面を強めたことであったろう。1939年6月にルルドへの巡礼をおこなったとき，また，その数週間まえの1939年4月にマルセイユで開催されたフランス人民党青年部全国大会での演説で，ドリオが信仰，権威，家族の尊重を訴えたとき，そして，反体制的小学校教員とフランスに侵入する「出稼ぎ外国人」を告発したとき，それはもはや忠実な支持者たちに話しかけるファシズムの指導者の姿や声ではなく，ウルトラ保守主義の大義に帰順した人物の姿や声でしかなかった[312]。

家族的，地方的，労使協調的秩序をつくりあげることによってフランスを再生させるよう訴えたドリオは，青年たちに「奉仕の精神」を説いた。それは，理想のためにエゴイズムを捨て，精神性のために物質主義を棄てることによってしか，そして「信仰」，「規律」，「犠牲」によってしか，フランスは立ち直ることができないという思いからであった。それはヴィシー政権成立のまえにヴィシー政権の主題とレトリックを先取りして主張したものであり，そこから受ける全体的印象は，ドリオが伝統主義に方向転換したということであった。身振り，儀式，全体主義からの影響は，初期のファシスト的飛躍のときからなお引き継がれていたが，しかし，ドリオのスピーチとかれが打ち出す構想は，もはや伝統主義右翼のそれでしかなかった。かれの運動の挫折による意気喪失の結果と，ドイツやイタリアのファシズム体制との協調の失敗と戦争の接近にたいする反作用とをそこにみることができようが，ドリオの革新運動の挫折が，かれをきわめてフランス的な思潮に引き戻したという事実には，はやり意味深いものがあったといえよう。

1939年春に形成された英仏と独伊の2つのブロックのあいだで，ソ連は英仏の側につくようにおもわれた。フランスでは，1935年5月2日に締結された仏ソ相互援助条約は，その後，事実上，死文化し[313]，緊密な仏ソ関係の復活には外交政策の根本的な転換が必要であったが，1939年3月15日のドイツ軍のプラハ占領と4月7日のイタリアのアルバニア侵略が，この転

[308] *L'Emancipation nationale*, 24 mars 1939.

[309] ドイツ軍がプラハを占領した1939年3月15日以後のフランス人民党の態度については，D.Wolf, *op. cit.*, p.288 sq., 平瀬・吉田訳，p.283 sq.; J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit.*, p.301 sq.; Ph. Conrad, *op. cit.*, p.323 sq.

[310] *L'Emancipation nationale*, 19 mai 1939.

[311] Lanoux, Le discours de Lourdes, *L'Emancipation nationale*, 9 juin 1939.

[312] P. Milza, *op. cit.*, p.178.

[313] Anthony Adamthwaite, *France and the Coming of the Second World War*, Frank Cass, London, 1977, pp.272-273.

換を促進した。こうして，フランスの主要政治家たちは，1935 年に調印された仏ソ相互援助条約を補足する軍事協定の締結を推進することによって，ソ連との関係強化の必要を主張するようになった[314]が，しかし，スターリンにたいする疑惑を捨てていなかったドリオは，ソ連との同盟の必要を認めようとはしなかった。ドリオは，ソ連との外交関係からは安定的で確固としたものはなんら期待できず，たとえソ連が約束をした場合でも，おそらく戦争の最中にその条約を覆すであろうと確信していたようであった[315]。しかし，ドイツのあらたな侵略を未然に防ぐには，ソ連との軍事協定の締結を決意しなければならないほど事態は切迫していた。1939 年 4 月，英仏とソ連とのあいだで軍事を含む相互援助協定締結の交渉が始まった。

一方，ドリオは，イタリアにはたらきかけることが必要だと考え，1939 年春，ムッソリーニに宛てたつぎのようなメッセージをもたせて，マルセル・マルシャルをローマに送った。「われわれは，共通の文明と文化の名において，また，われわれが思想的，社会的なたたかいによって守ろうとしている原理の名において，戦争に突入しないように，あなたに懇願します・・・あなたもよくご存じのように，あらたな戦争は文字通りの自殺行為となりましょう。この戦争の最終的な勝者となるのは，ただひとつの大国ソヴィエト・ロシアです。」しかし，イタリアの外相は，これにたいして，ファシスト・イタリアはすでにはっきりとドイツ帝国の側についているので，この同盟関係をひっくり返そうと考えることなどはできないと返答してきた[316]。

英仏とソ連との交渉[317]は，遅々として進まなかった。1939 年 7 月 14 日，ドリオは，『国民解放』紙に「幻想の協定」と題した論説を公表し，「ソヴィエト・ロシア人たちの 2 枚舌，偽善，裏切り」にもかかわらず，フランスとイギリスの外交官たちが「目的達成のために絶望的な努力を払っている」とのべ，つぎのように主張している。「最後には，ソ連邦がフランスとイギリスの側につくという幻想を実現することができると期待しつつ，交渉が続けられている・・・モスクワは，外交交渉では拒否しても，戦争になれば同意するだろうという執拗な幻想にとりつかれている人びとがいるが，現在おこなわれている議論は，反対に，戦争が起こった場合には，ロシアの裏切りはほとんど避けられない既定の事実であることを証明している・・・スターリンの政策は明白である。すなわち，ヨーロッパの 2 つの集団を対立させて全面戦争を起こさせ，ソ連邦が直接攻撃されないかぎり，この戦争には加わらずにいること，ソ連邦が攻撃された場合には，フランスとイギリスから軍事援助を受けるという保証をとりつけておくこと，そして，いずれの場合にも，革命を促進するために，戦争によって引き起こされたヨーロッパの危機を利用することであ

---

314) Georges Bonnet, *Dans la tourmente, 1938-1948*, Arthème Fayard, Paris, pp. 129 sq.; Jean-Baptiste Duroselle, *La Décadence*, Imprimerie nationale, Paris, 1979, p. 482.

315) D.Wolf, *op. cit.*, p. 289，平瀬・吉田訳，p. 284; J.-P. Brunet, *Jacques Doriot . Du communisme au fascisme, op. cit.*, p. 302.

316) J.-P. Brunet, *ibid.*, pp. 301-302, 531.

317) 英仏とソ連との相互援助協定締結の交渉経過については，A. Adamthwaite, *op. cit.*, pp. 310, 311-312, 316, 327, 336, 338; A. J. P. Taylor, *The Origins of the Second World War*, Hamish Hamilton, London, 1961, Penguin Books, 1964，吉田輝夫訳『第 2 次世界大戦の起源』中央公論社，1977 年，pp. 299-300, 302.; 笹本駿二『第 2 次世界大戦前夜――ヨーロッパ 1939 年――』岩波新書，1969, pp. 64-67, 80-85, 106-113; 齊藤治子『独ソ不可侵条約――ソ連外交秘史――』新樹社，1995 年，pp. 54, 81, 88, 89, 90, 116-117, 131-139, 140, 147, 177, 200-201; 松川克彦『ヨーロッパ 1939』昭和堂，1997 年，pp. 132-159, 173; 渡邊啓貴「ダラディエ政権下のフランス外交」日本国際政治学会編『国際政治』第 72 巻，1982 年 10 月，pp. 47-48, 154-174, 185-196, 216-236, 239-244, 263-268; 中西治「1938-39 年のソ連外交――ミュンヘン協定から独ソ不可侵条約へ――」日本国際政治学会編『国際政治』第 72 巻，1982 年 10 月，pp. 55-56; 竹岡前掲書，pp. 537-544.

る[318]。」

実際には，スターリンは，英仏との交渉を始める一方で，同時に，ドイツとの接近をひそかに試みていた。フランス政府は，ソ連との協定は遅くとも1939年5月中頃までに調印されるであろうと考えていたが，交渉の進展がないまま，数週間が過ぎ去った。フランスの外交官たちは独ソ接近の危険を注意し，フランス外務省もイギリス外務省にそのことを警告したが，イギリス政府は，独ソ接近など「本来，とうていありえない[319]」と考え，ヒトラーとスターリンとのあいだの秘密合意の可能性を示唆する報告を信用しようとはしなかった。

今日では，1939年6月以来ドイツとの交渉を始めていたスターリンが英仏とドイツのどちらを選択するかは，8月まではまだ決定されず，かれが事態を引きのばしていたことが知られている。また，イギリス政府が，ボルシェヴィズムの危険はヒトラーの危険に匹敵すると考え，ソ連との話し合いにできるだけブレーキをかけようとしたことも知られている。イギリス政府は，ソ連がヒトラーに近づくのを引き止めるためにのみ，ロシアとの折衝にはいったのであり，ヒトラーに英仏ソ軍事協定の脅しをかけることによって，時間を稼ぎ，戦争を遅らせようとしていたのだということも知られている。フランス政府の方は，ロシアと一刻も早く交渉を妥結させ，軍事協定の締結にまで漕ぎつけようと必死になっていた[320]。

英仏とソ連との交渉は，結局失敗した。1939年8月23日，ドイツ外相フォン・リッベントロープが，ソ連との不可侵条約に調印するためにモスクワに到着した。独ソ不可侵条約締結のニュースは，ヴァカンスの空にとどろく雷鳴のように，フランス国民をおびえさせ，ヨーロッパだけでなく全世界を震駭させた[321]が，それはドリオの警告に予言的価値をあたえるものでもあった（独ソ不可侵条約に付属していた，独ソ間での東ヨーロッパ分割計画にほかならない秘密議定書の存在が明るみに出たのは，第2次世界大戦後のことであった）。

ミュンヘン協定調印後，ヒトラーは今度はポーランドにたいしてダンツィヒの返還を要求し，ポーランドがそれを拒否して，戦争の気運があらたに高まったとき，ネオ・ソシアリストのマルセル・デア（1933年，社会党SFIOを離党，あらたに結成したフランス社会党ジャン・ジョレス連合の書記長）が1939年5月4日の『ウーヴル』紙に，「ダンツィヒのために死ねるか」と題した論説を発表した[322]のにたいして，ドリオは，6月11日，ニオールでおこなった演説のなかで，「ダンツィヒのために死ねないか」と応じ，「伝統も歴史もあり，生きたいと願っている国民がしめ殺されるのをわれわれは見逃すことはできない。つぎの日には自分が攻撃される破目に陥るかもしれないのに，われわれは一国民が虐殺されるがままにしておくことなどできない」とデアを厳しく非難した[323]。

それ以後，ドリオは戦争やむなしと考えるようになり，1939年8月18日の――開戦2週間まえの――『国民解放』紙の論説において，「フランス国民は，いまでは，数か月まえにはかれらを戦慄させていた戦争の観念を受け入れようとしている・・・人類にとっては不幸なこ

318) *L'Emancipation nationale*, 14 juillet 1939.

319) *Cabinet minute or memorandum in the Public Record Office*, 23/99; A. Adamthwaite, *op. cit.*, pp. 323-324.

320) J.-B. Duroselle, *op. cit.*, pp. 416, 431 et passim; René Girault, Pourquoi Staline a signé le pacte germano – soviétique, *Histoire*, no. 14, juillet – août 1979.

321) 独ソ不可侵条約はまれにみる恥知らずな政治的シニシズムの例であったが，しかし，「ドイツのオーストリア併合以来の英仏の外交が独ソ同盟をほとんど既定の結論にした」のであり，「背信にたいする不平と怒りは，ほとんど正当化できないものであった」とアンソニー・アダムスウエイトは主張している。A. Adamthwaite, *op. cit.*, p. 338.

322) *L'Œuvre*, 4 mai 1939.

323) Jacques Doriot, *Discours prononcé le 11 juin 1939 à Niort*, Niort, 1939, cit. par D. Wolf, *op. cit.*, p. 289，平瀬・吉田訳，p. 284.

とだが，もし人類の過誤により，あらたな大動乱がヨーロッパを襲ったならば，ヨーロッパはみせしめの罰を受けるであろう・・・ドイツは――ヒトラーのドイツですらも――，われわれに戦争を押しつけることさえしなければ，生存できるのである。さもなければ，ドイツは，みずからが犯した過誤と犯罪の重荷の下で消え去るであろう」とドイツにたいして厳しい警告を発した[324)]。

独ソ不可侵条約が締結されたとき，ドリオの反応は基本的に反共産主義的であった。「スターリンはフランスを裏切った。かれに答えるには，共産主義を破壊し，裏切り者の党を解散させ，その指導者全員を投獄すべきである」とドリオは論評した[325)]。フランス国民は，モスクワでおこなわれていた英仏とソ連との交渉の現実についてなにも知らされていなかったので，ソ連の破廉恥な方向転換は，かれらの目には，弁明の余地ない裏切りと映った。独ソ不可侵条約締結のニュースがかれらのあいだに引き起こしたのは，ソ連にたいする「不快感と軽蔑であり，それがまともな考え方をするフランス人の感情であった[326)]。」

もっともひどい失望を味わったのは，反ファシズムの名において仏ソ接近に懸命になっていた左翼の政治家や知識人，労働組合であった。労働総同盟（CGT）運営委員会は独ソ不可侵条約の承認を拒否し，8 月 25 日，その機関紙『ル・プープル』は，「ギャングが善良な市民をおどしつけるやり方」で他国の国民をおどそうとしているスターリンの外交を激しく非難した[327)]。8 月 30 日，人権同盟委員長ヴィクトル・バーシュやノーベル賞受賞者ジョリオ・キューリーらの加盟するフランス知識人連合が，ソ連の「国際関係における二枚舌を非難し，その驚愕を表明」した。共産党は狼狽した。幹部は党員たちにソ連の方向転換の理由を説明するのに四苦八苦し，8 月 26 日の『ユマニテ』紙は，モスクワで英仏の代表団に交渉の決裂がはっきり通知されたにもかかわらず，なお，その反ファシズムとソ連の政策への支持とを両立させるのに躍起になり，「独ソ不可侵条約は，ナチズムの基本的教義全体の突然の放棄である」と弁明した[328)]。フランス政府は，共産党の夕刊機関紙『ス・ソワール』を 8 月 25 日夕方に，『ユマニテ』紙を 8 月 26 日朝に発行禁止にするとともに，共産党の集会，宣伝活動を禁止した。

9 月初めには，サン・ドニを始め，パリ北郊の工業諸都市（オーベルヴィリエ，コロンブ，アルジャントゥイユ）では，多くの工場で共産党員たちは党の幹部をどやしつけ，「あっという間に，共産党の指導者たちは，その党員たちの 5 分の 4 から見捨てられた」とドリオが語ったことが大衆紙によって報じられた[329)]。これらの都市では，『解放』紙は，共産党地方グループとその指導者たちによる独ソ協定否認の情報を繰り返し掲載し，フランス人民党は，そのすべての地方組織に，独ソ協定に反対する共産党員，その地方幹部，市会議員，労働組合員たちの署名をできるだけ多数集めるよう指示した。

1939 年 9 月 1 日早暁，ドイツ軍がポーランドに侵攻し，9 月 3 日，イギリス，ついでフランスがドイツにたいして宣戦布告して，第 2 次世界大戦の幕が切って落とされた。ドリオは 41 歳になっていたが，9 月初めに，サンリスの地方守備軍第 24 連隊に編入された。かれは軍曹に昇進していた。ヴィクトル・バルテレミーによれば，ドリオにとって幸運だったのは，かれの司令官がフランス人民党のシンパであった元アクション・フランセーズの団員だったこと

324) *L'Emancipation nationale*, 18 août 1939, cit. par D. Wolf, *op. cit*., pp. 289-290，平瀬・吉田訳，pp. 284-285.
325) Cit. par D. Wolf, *ibid*., p. 290，平瀬・吉田訳，p. 285; V. Barthélemy, *op. cit*., p. 156.
326) *L'Intransigeant*, 24 août 1939.
327) *Le Peuple*, 25 août 1939.
328) *L'Humanité*, 26 août 1939.
329) *Gringoire*, 7 septembre 1939.

である。そのため，ドリオは，さしたる困難もなく，『国民解放』紙——その判型は半分のサイズになっていた——のために論説を書きつづけることができたが，軍の規則によって，それらの論説は，召集されていない党幹部のピエール・デュティユールの署名で掲載された。しかし，「もちろん，わたしは，この論説で，党政治局の見解を表明しているにすぎない」という断り書きが記されていたので，読者は論説の本当の筆者がだれかを推察することができた[330]。

しかし，フランス人民党の組織は，開戦によって多数の党員が召集されたために，大きく混乱した。パリとサン・ドニでは，アンリ・バルベ書記長を筆頭とする指導部の一部が存続し，マルセル・マルシャルやピエール・デュティユールらとともに，パリ地域の上級幹部やサン・ドニの古参党員の一部が残っていたが，しかし，この時期の他のすべの政治組織同様，フランス人民党の活動もほとんど麻痺状態に陥った。このような状況で党を指揮しつづけるためには，ドリオがパリの近くにとどまることがどうしても必要であった。この頃，パリ警視総監ロジェ・ランジュロンが——戦後1946年に公刊されたかれの回想録[331]によれば——「ドリオは，この巨大でたくましい男に似つかわしくないほど，前線に送られるのをひどく病的に恐れている」と，サンリスの軍情報部でドリオにかんする情報を集めていた一警部に書き送っているが，このような意見を警視総監に書かせたのは，ドリオが，フランス人民党の指揮をとるため，パリ近くにいることの必要をつよく意識していたからであったろう。

当時は，宣戦布告はされたが，軍事行動はまったく起こされず，英仏連合軍とドイツ軍がはじめて戦火を交えたのは，1940年5月10日以後のことにすぎず，それまでは「おかしな戦争」と呼ばれる「戦闘のない戦争状態」が続き，前線では戦闘はまったくおこなわれていなかった。このような事実や両度の大戦でドリオが示した勇敢な行動を想起するならば，警視総監の言葉通り，ドリオが，戦闘に参加するのを恐れるあまり，前線に送られるのをおびえていたとは，にわかには信じがたい[332]。

1939年11月初めには，あらたな危機がフランス人民党を見舞った。政治局の会議の前日，書記長のアンリ・バルベが，ドリオがいないときに，政治局の他のメンバーに，2人の幹部エミール・マッソンとモーリス・ルブランの，2人がそれぞれ従事していた職務——党の経理と『国民解放』紙の運営——からの辞任を要求するつもりであると告げた。翌日，サン・ドニ市役所で，ドリオも出席して会議が開かれたとき，アンリ・バルベはかれの提案を正式に表明した。ドリオは政治局メンバーの意見を求め，全員はバルベの提案に同意した。しかし，ドリオだけは同意せず，マッソンとルブランを弁護した。おそらく，あらかじめ自分に相談することなく部下たちがこのように重要な人事問題を決定しようとしたことが不満だったのであろう，ドリオは，政治局メンバーの全員が同意している以上，自分は党首を辞任すると発言し，会議の席から立ち去った。もちろん，みせかけの退出であったろう。

マルシャルとデュティユールがドリオに午後の会議に出席するよう説得することに成功し，数時間後に会議が再開されたときには，協調的な雰囲気のなかで両方からの釈明が聞かれるのではないかとおもわれたが，しかし，まもなくアンリ・バルベが，午前中の議論をむし返して，ドリオに反抗し，それにくわえて，ピュシュー，マリヨンその他のすでに離党した旧幹部たちと同様，ドリオの私生活を非難し，書記長の職を辞任して，自分も離党すると言明した。ドリオは，あえてバルベに答えようとはせ

330) V. Barthélemy, *op. cit.*, p.158.
331) R. Langeron, *op. cit.*, 137-138.
332) J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit.*, pp.304-305.

ずに，会議を閉会した[333)]。バルベは，ドリオが「かれの個人的野心のために，さらには，かれ自身の直接的利益のために，党の真の利益を犠牲にしている」と非難し[334)]，離党後は，マルセル・デアが 1941 年 2 月に結成した国家人民連合（RNP）に加わった。ドリオはヴィクトル・バルテレミーをバルベの後任として選び，かれにフランス人民党書記長のポストを任せた。アンリ・バルベ自身は，その後，ドリオやバルテレミーと友好的な関係を取り戻し，その関係はのちのちまで続いた[335)]。

戦争勃発後はじめて開催された 1940 年 3 月 31 日のフランス人民党全国評議会のときには，ドリオは，「平和条約では，フランスはライン左岸の占有を要求しなければならないだろう。しかし，それは領土獲得の意志からではなく，将来の一切の攻撃からみずからを守るためである」とのべる一方で，この戦争で「われわれが戦っているのは，政治体制のひとつの形態に反対してではない」と言明した[336)]。それは，あたかも，ナチズム体制が戦争とは無関係とみなしているかのようであった。

同時に，ドリオには，あいかわらず，執拗な反共産主義の主張がみられた。フランス国民のあいだでソ連と共産党にたいする非難が最高頂に達したのは，ソ連赤軍が，ポーランドに侵入したあと，フィンランドを攻撃したときであった。ソ連のフィンランド攻撃は，その領土拡張欲を満足させるためという以外に，言い分けのできないものであった。これにたいして，ドリオは，1940 年 2 月の『国民解放』紙で，「この戦争の最初の軍事的大成功は，ソ連を攻撃し，ソヴィエト的野蛮に反対する戦いのなかで，世界をボルシェヴィズムにたいする反乱に引き入れることのできる人びとによって収められるであろう」と書いていた[337)]。すでに，戦争相手の混同が，ドリオのなかではっきりと始まっていた。

1940 年 5 月 10 日（正確には 5 月 9 日から 10 日にかけての夜），ドイツ軍がベルギーとオランダにたいする攻撃を開始し，両国を占領して，その矛先を西へ転じたとき，フランス人民党政治局は，全党員にたいして「国土防衛のために団結する」よう呼びかけた。ドリオは 6 月 17 日から 20 日までロワール（フランス中央部リヨネ地方）戦線（シュリー・シュール・ロワールとヴィルベルヴィエ）で戦闘に参加し，その勇敢な行動を軍から表彰され，そして銀星戦功十字章を授けられた[338)]。

戦端開始後，わずか 6 週間で戦争は終わった。フランス軍は戦車と急降下爆撃機を連動させたドイツ機甲部隊の攻撃の前に完膚なきまでの敗北を喫し，6 月 16 日夜，首相に任命されたフィリップ・ペタンは，6 月 17 日，ドイツに休戦条件を照会し，その回答を待たずして，ラジオをつうじて，フランス国民に「戦いをやめなければならない」と宣言した。6 月 22 日，フランスとドイツとのあいだで休戦協定が調印された。休戦後，ドリオは，戦友たちとともに，一般の住民から民間人の衣服を手に入れてドイツ軍の捕虜になるのを免かれ，多くの苦難に遭いながらも，6 月 26 日，サン・ドニに戻ることができた[339)]。

---

333) V. Barthélemy, *op. cit.*, p. 158 - 159.

334) *Archives Nationales*, Cour de Justice de la Seine, dossier Fossati, Rapport sur le PPF de l'inspecteur Valentini, p. 4.

335) V. Barthélemy, *op. cit.*, p. 160. アンリ・バルベとヴィクトル・バルテレミーとの厚い友情に刻印された関係は，第 2 次世界大戦後，2 人が刑務所を出たあとも続き，バルベの死まで続いた，とバルテレミーは書いている。

336) V. Barthélemy, *ibid*, p. 163.

337) *L'Emancipation nationale*, 9 et 16 février 1940, cit. par D. Wolf, *op. cit.*, p. 293, 平瀬・吉田訳, p. 288.

338) D. Wolf, *ibid.*, pp. 293 - 294, 平瀬・吉田訳, p. 288 ; J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit.*, p. 306.

339) Simon Servant, Le sergent–chef Jacques Doriot dans la Bataille de France, note（41）in Bernard – Henry Lejeune éd. *Jacques Doriot et le PPF*, Amiens 1977 ; J.-P. Brunet, *Jacques Doriot. Du communisme au fascisme, op. cit.*, p. 307.

Jacques Doriot et le Parti populaire français de 1936 à 1940. 3

Yukiharu Takeoka

La fondation, en juin 1936, du Parti populaire français par l'ancien communiste Jacques Doriot marque la naissance du premier parti fasciste français de masse. Dans quel sens le Parti populaire français était-il fasciste? Il est aujourd'hui communément admis que l'idéologie n'occupe pas une place fondamentalement plus importante au sein d'un parti fasciste que dans n'importe quel autre courant politique. La réponse réside d'abord donc dans le comportement du Parti populaire français. Dès son premier congrès en novembre 1936, son comportement apparaît comme dépourvu d'ambiguïté. Par son cérémonial, par son organisation et son comportement politique, par la sociologie de ses adhérents et sa doctrine, voire par ses liens avec le fascisme italien, le Parti populaire français peut être considéré comme le seul parti fasciste de masse que la France ait connu.

Au printemps de 1937, Doriot a émis l'idée de la formation d'un Front de la Liberté, organisation coopérative anti-marxiste et engagé des négociations avec un certain nombre de partis et mouvements de droite. Mais le rejet final d'adhésion du Parti social français de François de la Rocque, en particulier, a fait échouer la tentative de Doriot. Pour le Parti populaire français, les accords de Munich, signé le 30 septembre 1938, furent l'occasion d'une très grave crise. Le défaitisme de Doriot devant la crise de Munich a causé la démission de plusieurs membres de son état-major et des intellectuels influents. Abandonné par tous ceux qui ont jugé que Doriot ne pouvait pas devenir un Mussolini français et ayant peu à peu perdu l'appui des masse et, surtout, du milieu des affaires, le Parti populaire français ne représentait plus qu'une force marginale, de plus en plus nettement rangée à la droite tranditionaliste, à la veille de la deuxième guerre mondiale.

Classification JEL: N44
Mots- clés: Doriot, communisme, fascisme